

〔讀方〕 六四は孚あり。血み去り。惕れ出づ。咎なし。

〔大意〕 此の爻は陰で陰の位に居つて而も五陽を制して居るものである。さう云ふと如何にも悪いやうであるけれども本人が悪いのでなくして周囲の事情が斯の如くなり來つたのである。本人自身は極めて孚ある人である。それ故に血みも去り惕も出てなくなつてしまふ。従て咎なきことが出来るのである。

〔占考〕 小人が心を悩まして居るの意味があるけれども己れは誠あるが故に何等禍を被ることなきの意味がある。力に合はざる大會を催ふすの意味がある。孚ありて人の助けを得るの意がある。

九五。有孚攣如。富以其隣。

〔讀方〕 九五は孚有りて攣如す。富其隣を以てす。

〔大意〕 此の爻は陽で陽の位にあり、正しいものである。それであるから却々六四の爲めに抑へられるやうなことはない。孚の徳があつて上下四陽を引連れて其の正しい所に復らうとする。そこで富其の隣を以てすと云ふのである。

〔占考〕 知人連合して事をなし得るの意あり。人と共に富みを得るの意あり。大に人を助くるの意味がある。成功の意味もある。

上九。既雨既處。尚德載。婦貞厲。月幾望。君子征凶。

〔讀方〕 上九は既に雨ふり既に處る。德を尙んで載す。婦貞なれども厲し。月幾望に幾し。君子征くときは凶なり。

〔大意〕 此の爻は陽で一番上に居るから六四の爲めに制せられることがない。故に既に雨ふり既に處ると云ふ。雨ふると云ふのは陰と陽とが和したことを云ふので、處るも同様である。殊に九五の德を尙ぶことが甚しいのを形容して德を尙んで載すと云つたのである。上九は斯の如く善い人であるから六四の女は正しいけれども厲いと云ふことを知つて居る。即ち月の望に幾しと云ふが如く女の氣が盛んになれば何を仕出かすか分らないと云ふことを知つて居る。さう云ふことを知らないで居ればそれこそ大變である。君子征くときは凶なりと云ふのは即ち是れである。上九は斯の如き女と親しむことはないと云ふ



のである。

〔占考〕 己れを制せんとするものがあるけれど、其の制する所とならざる意味がある。又女難を戒しむべきの意味もある。



履虎尾。不咥人。亨。

〔讀方〕 虎の尾を履む。人を咥はず。亨る。

〔大意〕 此の卦は天が上にあつて澤が下にある。澤は低いもの、天は高いもので、自然に上下の別があるけれども、一の陰が上下五陽の爲に壓せられて居るから、危険であると云ふ意味もある。そこで此の卦を名けて履と云ふ。履と云ふのは同音の麗の字であつて、禮と云ふことであるけれども、其の危険な方から云ふと、甚しいものがあるから、直ちに虎の尾を履むと讀まして、迫害せられる意味を示めて居る。けれども人を咥はず亨ると云つて、虎の爲めに咥はれるやうなことは無い。何故ならば、虎の尾を履んでは居るけれども、極めて從順なるものであるから、それ程までの害はないのである。何故從順と云ふことが分るか、と云ふと、下の兌と云ふ卦は悦ぶと云ふのであつて、天に從つて喜んで居るから、そこで亨ることが出来る、と云ふのである。

〔占考〕 此の卦は上下の分が定ると云ふ意味である。兌の少女が乾の丈夫に接して居るのであるから、悦びを以て男に接するの意味がある。故に一面から云へば、危いと云ふ意味もあるけれども、又危いことを免れる意味にもなる。其の危い所から云へば、總ての事安からざる意味もある。殊に女の方から云へば、非常に細心の注意をしなければならぬのである。又男の方から云へば、女に乗せられんとする。動もすれば翻弄せられんとする意味もある。總て鬱血する意味がある。又一陰を中心として、上下の陽を取つて見れば、離の卦になる。離を目とする。目はあるけれど、上下五陽の爲に壓せられるから、甚だ明かでない、と云ふ意味がある。

初九。素履。往无咎。



〔讀方〕 初九は素履す。往いて咎なし。

〔大意〕 此の爻は陽で陽の位にあるから先づ其の身分に安んじて居ると云つても宜い。それを履み行ふに當つて少しも身分を越へたることはしない。故に素履すと云ふ此の儘で往けば何等の悪いことがあるべき筈がないから往いて咎なしと云ふ。

〔占考〕 質朴の行をして居れば差支ないのであるが之を占ひの方面から云へば物事を實行しても差支ないのである。

九二。履道坦々。幽人貞吉。

〔讀方〕 履道坦々。幽人貞にして吉なり。

〔大意〕 此の爻は陽で陰の位にあるけれども下の中央にあるものであるから極めて善い人間と云はなければならぬ。其の履み行ふ所は坦々として平らである。そこで履道坦々と云ふのである。私慾を離れた幽静の人の様である。幽人貞にして吉なりと云ふのである。

〔占考〕 坦々として順序を進んで事をなすべきの意あり。靜かにして時を待つべきの意あり。幽人らしくすべきの意あり。

六三。眇能視。跛能履。履虎尾。咥人凶。武人爲于大君。

〔讀方〕 六三は眇能く視。跛能く履む。虎の尾を履む。人を咥ふ。凶なり。武人大君と爲る。

〔大意〕 此の爻は陰で陽の位にあり且つ一陰で全卦の主となつて居るが固より全卦を率ゐることの出来る譯のものではない。其の狀態は恰も片目見えないものが見やうとしても見ることは出来ない。跛の者が歩まんとしても歩くことが出来ぬやうなものである。實に危険千萬なものである。眇能く視跛能く履む虎の尾を履むと云ふ斯う云ふことをやつて居れば必ず咥はれてしまふから人を咥ふ凶なり。其の亂暴なることは丁度武道一片の人が大君となつたやうなものでも少しも文の方面を知らないから逆も天下を治めるに堪へない。であるが故にそこで武人大君と爲ると云ふたのである。



〔占考〕 占ひの上から云へば萬事失敗に終るものである。一方に偏し、一部に捉はれる。任重くして堪へざるの意がある。勢に乗じて妄進し、事を破るの意がある。他より嫉妬せらるゝことあり。一時は成功の如く見らるゝことあり。

九四。履虎尾。愬々。終吉。

〔讀方〕 九四は、虎の尾を履む。愬々たり。終に吉なり。

〔大意〕 此の爻は陽で陰の位にあるから、先づ地位が高くして危険なるものと云はなければならぬ。けれども衷心非常に怖れる意味があるから終に吉なることが出来るのである。虎の尾を履むけれども愬々たり終に吉なりと云ふ所以である。愬々は恐れる貌。

〔占考〕 初めは危険であるけれども後には安全なるの意がある。危難あれども畏懼すれば吉なるの意がある。

九五。夬履。貞厲。

〔讀方〕 九五は夬して履む。貞なれども厲し。

〔大意〕 此の爻は陽で陽の位に居るから實行の段になると云ふと随分決斷が宜い。そこで夬して履むと云ふのである。餘り決斷が宜過ぎるから却つて危険だと云ふので貞なれども厲しと云つて居る。

〔占考〕 萬事斷行に過ぎては危い。斷行を慎まなければならぬ。けれども一時期を劃するの意がある。

上九。視履考祥其旋元吉。

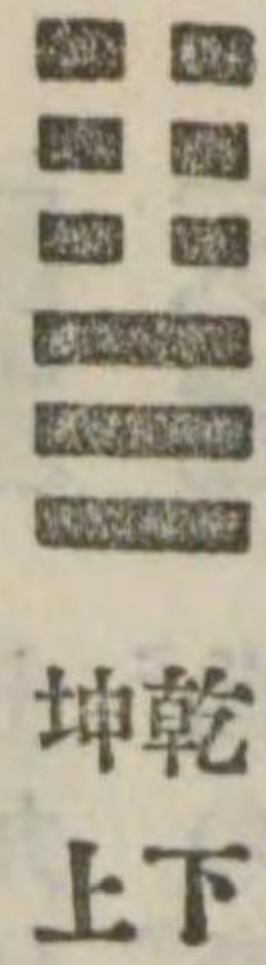
〔讀方〕 上九は履を視て祥を考ふ。其れ旋れば元吉なり。

〔大意〕 此の爻は履の卦の極にある。履み行ふの終りである。萬事の終りである。故に其の事を省みなければならぬ時であるから、そこで履を視て祥を考ふと云ふて居る。祥と云ふのは詳かあることであつて、どう云ふのであらう斯う云ふのであらうと云つて委細のことをば考へて見るのである。自分の實行し來つた所を委細に考へて見る。之を參考とし反省する所があれば必ず大なる



る利益を蒙むることが出来るから、それで旋れば元吉と云ふ。

〔占考〕 處世道上道徳上から云へば自己の過去を省みて参考にせんければならぬのである。又占ひの上から云へば既に實行の時機を超過してしまつて批評の時機に入つて居るのである。先づ幸を得たるの意がある。



泰小往大來吉亨。

〔讀方〕 泰は大往き小來る。吉にして亨る。

〔大意〕 此の卦は地が上にあり天が下にある。地氣が上に昇り天氣が下に下る。陰陽相交はるの意味がある。そこで名けて泰と云ふ。泰平の意である。他の一面から見れば陰が上にあるから既に往いてしまひ陽が下にあるから新たに來たのである。そこで小往き大來ると云ふのである。小は陰で大は陽である。從て吉にして亨ると云ふのである。〔占考〕 此の爻は小人次第に消滅するの意味があるけれどもまだ小人が勢力を

占めて居るのである。故に思ふ所は萬事成すとは出來ない。又小人が去つた處で既に天下は泰平に歸して居るのであるから成すべきの時ではない。通する意味もあり。和合の意味もある。又天地の氣が交通するのであるから人間にすれば懷妊の意味である。泰は變じて否となるから困難の來る意味もある。

初九拔茅茹以其彙征吉。

〔讀方〕 初九は茅を抜いて茹す。其の彙を以てす。征いて吉なり。

〔大意〕 此の爻は陽で陽の位に在るから其の志は正しいものと云はなければならぬ。けれども泰の時陽は凡て進まんとして居る。進んでも差支ないけれども上の二陽と一所にすべきである。其の状態は恰も茅を抜くと云ふと二つも三つも根が繋がつて來るやうな者である。之を形容して茅を抜いて茹す。其の彙を以てすと云ふ。彙は同類を云ふたのである。此の分で行けば吉であると云ふのである。

〔占考〕 人と共にすれば吉なるの意味がある。必ず同類を得るの意味がある。



道德上處世上から云へば何でも自分一人と云ふことは宜くない。必ず多くの人と一所にするが宜いと云ふのである。

九二。包荒。用馮河。不遐遺。朋亡。得尙于中行。

〔讀方〕 九二は荒を包ぬ馮河を用ふ。遐遺せず。朋亡ぶ。中行に尙ふるを得。〔大意〕 此の爻は陽で陰の位に居り。下卦の中央に居るから其の志甚だ善いものである。其の初九を包含するとを荒を包ぬといふ。荒と云ふのは荒れて居ると云ふことで野原の草茫茫々として居る所を云ふたのである。乾を天となし野となすから初九を云ふたのである。馮河と云ふのは跣足で河を渉ることである。勇氣のあることを云ふたものである。即ち九三を云ふたのである。九二は初九をも包含し又九三馮河のやうな強いものをも使つて行く。遐遺せずの遐は遠きことを云ふ。遺は忘るゝ意味である。遠きものをも忘れないと云ふのは六四とか上六なども忘れないと云ふことを云ふたのである。而も九二は極めて公明正大の徳を有つて居る人であるから朋黨と云ふこともない。

故に朋亡ぶと云ふて居る。朋亡ぶ以上は中行に合することが出来るのである。尙は加ふるとか合するとかいふ意味である。

〔占考〕 善き人間となつて多くの人を包含するの意味がある。占ひの上から云へば人を集める意味がある。人に長となる意味がある。大體を統ぶるの意味がある。私黨を排斥するの意味がある。

九三。无平不陂。无往不復。艱貞无咎。勿恤其孚。于食有福。

〔讀方〕 九三は平の陂ならざるなく往の復せざるなし。艱貞なれば咎なし。其の孚を恤ふること勿れ。食に於て福あり。

〔大意〕 此の爻は泰の時の中頃に近かんとして居る。段々否の時が近いて來るから之れが戒めを示めて居るのである。平らな地面と雖も必ず遠くまで行けば傾いた所があり往いた者は必ず歸つて來る。物窮れば必ず變するのである。其の困難なことを知つて正しくしなければならぬと云ふことを云ふて平の陂ならざるなく往の復せざるなし艱貞なれば咎なしと云ふたのである。斯



の如き理窟が本當であると云ふことを信じて疑はなければ自分の食祿を得ることが出来ること云ふので、そこで孚有るを恤ふる勿れ云々といふてある。孚あると云ふのは、斯の如き理窟は嘘でないこと云ふことである。嘘でないこと云ふことを信じて其の積りでやつて行きさへすれば必ず福を得ることが出来ること云ふのである。

〔占考〕 盛んなるが如くであるけれども既に衰亡の兆がある。處世的に云へば大に憂ふれば挽回する事が出来るけれども占ひの上から云へば悪い方に向つて居る。

六四。翻々不富。以其鄰不戒以孚。

〔讀方〕 六四は翻々として富まず其の鄰を以てす。戒めずして以て孚あり。

〔大意〕 此の爻は陰で陰の位にあるから極めて優しいものである。下から三つの陽が進んで来やうとして居る。己れは之に抵抗することを嫌ふ。其の情は恰も翻々として富まざるが如き状態である。即ち貧相になつて居る。而も極めて

て優しく眞面目な人であるから其の徳は六五上六までも感化して同じく下に來らんとして居る。故に其の鄰を以てすと云ふのである。必ずしもそれがために警告を發するとなくとも無意識的に感化することが出来るから戒めずして以て孚ありと云つて其の心が通することを云ふたのである。

〔占考〕 從順にして以て人を感化するの意がある。奉公の至誠あるの意あり。事は成れども下るを可とするの意あり。

六五。帝乙歸妹。以祉元吉。

〔讀方〕 六五は帝乙妹を歸ぐ。以て祉あり。元吉なり。

〔大意〕 此の爻は陰で陽の位にあるけれども六四の徳に感化されて從順にして下に下らうとして居る。其の情は恰も昔般の帝の乙と云ふ人の妹が諸侯に嫁したけれども敢て高ぶることもないやうな状態であると云ふ所から引張つて來て帝乙妹を歸ぐと云ふたのである。さう云ふ状態だから能く家を立てることが出来るから以て祉あり元吉なりといふたのである。



〔占考〕 從順にして賢人に從ふの意あり。人を得るの意あり。

上六。城復于隍。勿用師。自邑告命。吝。

〔讀方〕 上六は城隍に復す。師を用ふること勿れ。邑より告命す。貞なれども吝なり。

〔大意〕 此の爻は上泰の極にある。故に變動の來るべき時機に際して居る。恰も築き上げた處の城が隍即ち空堀の中に戻つて堀になつてしまふと云ふやうなものである。城と云ふのは日本では石掛を築いて大層に造つたものであるけれども支那ではさうでない。土を積んだ丈のものを城と云ふ。一方に土を積みば一方に空堀が出来る。其の空堀に復ると云ふのは折角天下泰平になつても亦元のやうに亂れると云ふのである。そこを形容して城隍に復すと云ふたのである。最早や斯うなれば逆も天下を治めるなど云ふことは出來ない。師を用ふるなかれと云ふのは到底不可能なることを云ふたのである。而して諸侯の間若くは大夫の間から命令を發したりするのが出て來るから邑より告

命すと云ふた。如何に正しくして居つたからとて吝なるべきである。〔占考〕 此の爻は既に如何ともすべからざるものである。時勢が過ぎ去つたのである。けれども處世上道德上の教として何處までも正しいことをすべきである。故に人事を盡して以て天命を待つべきの意味がある。



坤上

否之匪人。不利君子貞。大往小來。

〔讀方〕 否は之れ人に匪ず。君子の貞に利しからず。大往き小來る。

〔大意〕 此の卦は天が上にあつて地が下にある。表面から云へば天地自然の順序を正して居る譯であるけれども其の眞の奥底を考へて見ると云ふと天は固より高かるべきもの地は固より低かるべきものである。天地交はる所なくして一切萬物は行はれない。否は天地の交はらない象である。三本の陽が往き去つて新たに三本の陰が來る。是は實に人道の行はるゝ時でないから否は之れ人に匪ずと云ひ。君子が事をなす時でない。故に君子の貞に利しからず大



往き小來ると云ふ。

〔占考〕此の卦は萬事塞つて通せざるの意味がある。されば總て思ふやうには成り難い。下の人は上より壓迫せられ上の人は下より攻撃せられると云ふ按排である。時を待てば必ず亦通ずる意味がある。夫婦に付て云へば相争ひ君臣に付て云つても亦相争ふ意味がある。坤を腹となし乾を頭となす。頭が高く上にあり腹が下にある。故に腹が膨れる意味がある。萬事塞がつて居る。通せないのである。

初六。拔茅茹。以其彙。貞吉亨。

〔讀方〕初六は茅を抜いて茹す。其の彙を以てす。貞なれば吉にして亨る。

〔天意〕此の爻は上の二つの陰と同體であつて共に昇らんとして居る。故に茅を抜いて茹す、其の彙を以てすといふ。けれども本來陰であるから昇るべきものではない。故に貞なれば吉にして亨ると云つて上に昇らないことを戒めて居る。

〔占考〕小人が黨を結ぶ意味がある。相集まるの意味がある。

六二。包承。小人吉。大人否亨。

〔讀方〕六二は包承す。小人は吉。大人は否にして亨る。

〔天意〕此の爻は陰で陰の位にあり且つ上下二陰を包含するの位地にある。而して上九五に應じて居る。君に仕へる者としては相當である。此れ君子として仕へる所の道ではない。何故ならば時が否であるからである。けれども小人の道としては之で宜いのである。小人は吉、大人は否と云ふ所以である。けれども大人の時代ではないとは云ひながら又行はれないと云ふことはない。即ち小人の方面の仕事が行はれるのである。例へば商賣が繁昌するとか、土木に成功するとか云ふやうな物質的のことに成功するけれども、大人の道たる政治とか社會政策とか學問とか云ふやうな方面では大に行はるゝことは出来ないのである。

〔占考〕小人なれば吉なるの意味がある。長上の寵を蒙るの意がある。君子の



道を行はんとしても到底行へない意味がある。

### 六三。包羞。

〔讀方〕 六三は包羞す。

〔大意〕 此の爻は三の位にある極めて御轉變なるものである。天下の非なる時に當つて妄りに進まんとするのは小人の子々たるものである。羞づべきことであるから羞を包むと云ふてある。

〔占考〕 到底成功すべからざるの意がある。心に安からざるの意がある。罪あるの意がある。

### 九四。有命。无咎。疇離祉。

〔讀方〕 九四は命有り。咎なし。疇祉に離る。

〔大意〕 此の爻は陽で陰の位にあるから其の精神に於て極めて穩かなるものがある。既に九四になると云ふと否の時勢も變じて泰の時勢にならんとする。

そこで少し辛抱せよと云ふのである。即ち世間には一定の命數と云ふものがあるから狼狽へる必要はない。少し我慢せよ必ず天命が再び至るに違ひない。さうすれば咎がない。それで上の二陽と共に祉に離れると云ふのである。そこで疇は同類を云ふたものである。離の字は離れると云ふのであるけれども此處では懸ると讀む。離れるの反對である。

〔占考〕 時機を待てば必ず幸あるの意がある。己れ一人でなく他の人も共に福を得るの意味がある。

### 九五。休否。大人吉。其亡。其亡。繫于苞桑。

〔讀方〕 九五は否を休む。大人は吉。其亡びん其亡びんとして苞桑に繋がる。

〔大意〕 此の爻は否の時に當つて陽で五の位にある。否の時勢を變ずることが出来るものである。故に否を休む大人は吉、それ亡びん、それ亡びんとして苞桑に繋がること云ふ。苞桑と云ふのは木で其の根が甚だ堅くて容易に抜くべからざるものであるから其の木に繋がつて居ると云ふと頑として動くことは出来



ないのである。其れ亡びん其れ亡びんと云つて心配する心が頑として動かすべからざるやうであれば必ず宜いと云ふのである。

〔占考〕此の徳があれば必ず悲運を挽回することが出来るけれども占ひの上から云へば矢張り時運を大に迎へ來る意味がある。其の心の憂が容易に解くべからざる意味がある。

上九。傾否。先否。後喜。

〔讀方〕上九は否を傾く。先きには否。後には喜ぶ。

〔大意〕此の爻は否の終りであるから既に否の時勢が變じて泰の時勢となるのである。故に否を傾く。先きには否にして後には喜ぶと云つた。否を傾くと云ふのも矢張り上九の力に依て否を傾けるのであるやうでなければ到底此の任に當ることは出来ない。

〔占考〕時勢既に來るの意味がある。萬事成功の意味がある。一旦不良なりしものも良なるの意味がある。



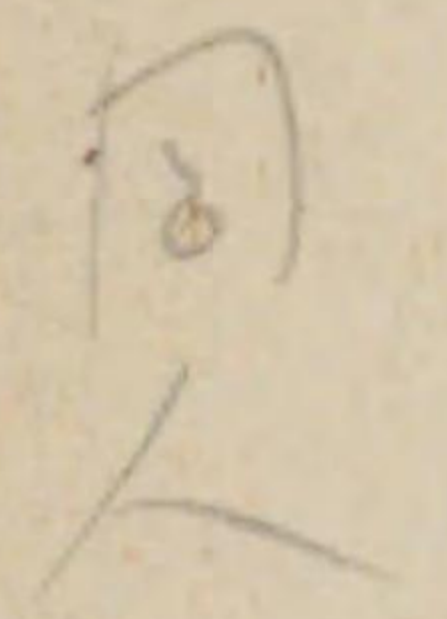
離下 乾上

同人于野。亨。利涉大川。利君子貞。

〔讀方〕同人は野に於てす。亨る。大川を渉るに利し。君子の貞に利し。

〔大意〕此の卦は天が上にあり。火が下にある。火は燃えて天と一所にならうとするものである。又卦の形の上から云ふと一の陰が下の方にある。勢力は弱い。五陽が此の陰に向つて集まる。極めて親睦の意味がある。故に其の卦を名けて同人と云ふ。直ちに處世上道徳上の訓戒を下して云ふ。人と親しむには須らく公明正大にすべきである。野に於てすと云ふのは之を云ふたのである。野は開いた處であるから公明正大の意味である。斯の如くすれば必ず萬事行はれるから亨ると云ふのである。更に又大川を渉るに利すと云つて居る。易では戒めを主とするものであるから君子の恒ある心でなければならぬ。小人の恒ある心であつてはならないと云ふのである。相親しむの意

味がある。故に人を待つて居つても其の人が





來る。又男女にすれば相和合する意味があるけれども不釣合である。總てのことは成立する。相互に相頼むの意味がある。離の日は天に附す。故に他に由りて發達するの意あり。離の火が乾の天を殺す。散財の意あり。女人愛せらるゝの意がある。

初九同人于門无咎

〔讀方〕 初九は同人門に於てす。咎なし。

〔大意〕 此の爻は陽で以て陽の位に在るから正しいものである。人と交るに其の道を得たるものである。恰も室内に入らずして出で、門外に於て相ひ會ふが如きである。私がない。故に同人門に於てす咎なしと云ふのである。

〔占考〕 外に出て交はるの意味がある。占ひの上から云へは先づ咎はない。

六二同人于宗吝

〔讀方〕 六二は同人宗に於てす。吝なり。

〔大意〕 此の爻は陰で以て陰の位に居る。而も一家の主人である。けれども元が陰であるから正當の道を以て交ることが出来ない。家の中で内證に交る意味がある。同人宗に於てす吝なりと云ふのは是れである。宗と云ふのは九五を指したものである。宗黨の意味である。

〔占考〕 高貴の人に得られるの意味があるけれども公明正大ならざる意味がある。心が狭い。占ひの上から見れば宜くない。

九三伏戎于莽升其高陵三歲不興

〔讀方〕 九三は戎を莽に伏す。其の高陵に升る。三歲興らず。

〔大意〕 此の爻は陽で陽の位にあるから過剛不中なるものである。其の志が正しくない。人と交るに當つて不正がある。六二と九五が相ひ親しんで居るのを見て羨ましがつて横から之を奪はふとする。奪ふに當つては兵を草叢の間に伏せて置いたり。且つ高陵に上つたりして其の動靜を伺つて居る。けれども私なことをして居るから思ふやうにならない。三年の久しきを経て手の下し



やうがない。三歳興らずと云ふ所以である。

〔占考〕 過剛不中。大に戒めなければならぬ。占ひの上から云へば大事を惹起すの意味がある。けれども何等手の下しやうがないと云ふ意味がある。又其の事正しからざるの意味がある。他人を妬むの意味がある。

九四。乘其墉。弗克攻。吉。

〔讀方〕 九四は其の墉に乘じ。攻むること克はず。吉なり。

〔大意〕 此の爻は陽で陰の位に居るから極めて優しいものである。故に六二と九五とが相ひ親しんで居るのを見ては心が平らかでないけれども、九三と違つて猛烈なることはしないのでやめてしまふ。であるから吉なることが出来る。其の墉に乘じ攻むること克はず。吉なりと云ふ所以である。

〔占考〕 其の心優なるが爲に多少の嫉妬心を起すとはあつても止めてしまふからして吉なることが出来る。占ひの上から云へば其の目的を達することは出来ぬ。消極的に守つて居れば言なりと云ふ意味である。

九五。同人先號咷而後笑。大師克相遇。

〔讀方〕 九五は同人先には號咷し而して後笑ふ。大師克つて相ひ遇ふ。

〔大意〕 此の爻は下の二と相ひ應じて居るけれども、九三、九四の如きものが妨害し居るから容易に其の目的を達することが出来ない。けれども終には相ひ遇ふことが出来る。そこで先には號咷して而して後に笑ふと云ふ。笑ふと云ふのは喜ぶと云ふ意味である。けれども此の目的を達する爲めには大なる戦を起さなければならぬから大師克つて相遇ふと云ふたのである。

〔占考〕 己れを妨害する者あるの意がある。我に來らんとする者あるの意がある。占ひの上から云へば初めは凶であつて後には吉なるの意味がある。けれども非常なる困難に遭遇することがあると云ふ意味がある。

上九。同人于郊。无悔。

〔讀方〕 上九は同人郊に於てす。悔なし。



〔大意〕 此の爻は同人の時に當つて六二を去ること最も遠い。であるから執着するとは割合に少ない。郊に於てすと云ふのは即ち此の所を示したものである。丁度野に於てすと云つた所と同じことである。悔なき所以である。

〔占考〕 處世上道徳上から云へば人と交るには斯の如くすれば宜いのである。けれども占ひの上から云へば外に出て人と交るの意味がある。世外に立つの意がある。執着せざる意味がある。



乾下  
離上

大有。元亨。

〔讀方〕 大有は元に亨る。

〔大意〕 此の卦は一陰が上にあつて五陽が之に従つて居る。有する處極めて大である。故に名けて大有と云ふ。多勢の陽を率ゐて居るのは餘程大なる精神がなければならぬ。逆も私人小惠のことでは行はれ難い。大に亨ると云ふのは大有の大なる精神を云ふたものである。

〔占考〕 一陰を以て衆陽を籠絡するの意味がある。大に人に施すの意味があるからして現在は大であるけれども必ずしも大に新たなる收入を得ると云ふとは出来ない。又女が上に居るのであるから必ずしも其の任に堪へざるの意味がある。多勢を籠絡するのであるから其の心を勞すと甚だしい。又病氣に付て云へば乾を肺となし離を火となすから火氣が肺を壓すると云ふ意味がある。又離は麗はしいとするから麗はしいものがある意味がある。又一の陰で衆陽を籠絡して居るのであるから袋の中に澤山の品物がある意味がある。

初九。无交。害匪咎。艱則无咎。

〔讀方〕 初九は交ることなし。害は咎に匪ず。艱なれば則ち咎なし。

〔大意〕 此の爻は大有の時に當り陽を以て陽の位に居るから其の所に安んじて居るものと云つても宜い。交ることなしと云ふのは即ち之を云ふたのである。之が爲めに己れを害せんとする者もあるけれども決して己れの罪ではないから構ふには及ばない。若し其の困難であると云ふとを知つて一生懸命に勉強



して居れば即ち咎はないのである。故に害あるも咎にあらす難なれば則ち咎なしと云つて居る。昔の君子は、世を治むるに、己の徳を以て人を治むるを得ないけれども、それでなければ必ずしも交る必要はないのである。初九は此の位置に當つて居る。占ひの上から云へば家に引込んで居つて吉なるの意がある。己れを害せんとするものあるの意味がある。終には其の目的を達するの意味がある。

九二。大車以載。有攸往。无咎。

〔讀方〕九二は大車以て載す。往く攸あるも咎なし。而も上下二陽を引きて連れて往かんとするのであるから、其の心の廣いこと恰も大なる車を以て載するが如くに廣いと云ふ感がある。此の心持を以てすれば大過はない。故に往く所あるも咎なしと云ふたのである。

〔占考〕此の志あれば宜い。此の志がなければ悪い。けれども占ひの上から云へば先づ吉なるの意味がある。他人と共にするの意味がある。人の爲に苦勞するの意味がある。人に仕へて宜いと云ふ意味がある。

九三。公用享于天子。小人弗克。

〔讀方〕公用て天子に享せられる。小人は克はず。

〔大意〕此の爻は陽で陽の位にあるから過剛不中である。けれども今や天子に用ひられる時であるから公用つて天子に享せらると云ふ。されども小人の心を以てすれば到底斯の如きことは出来なから小人は克はずと云つたのである。

〔占考〕處世訓道徳訓として見れば何處までも公明正大の心を以て上の人と交らなければならぬのである。占ひの上から見れば大に用ひられるのである。

九四。匪其彭。无咎。



〔讀方〕 九四は其の彭を匪す。咎なし。

〔大意〕 此の爻は六五に接近して居る。大臣にして見れば天子に信せられて居るものである。陽で陰の位にあるものであるから其の心が優にして己れが天子に信任せられて居ることを以て誇りとすることはない。故に其の彭を匪すと云ふ。彭は傍と云ふことであつて天子の傍である。匪すは傍に居ることを斥けると云ふことであつて傍にあることを以て自慢としないことを云ふたものである。

〔占考〕 上位の人に信任せらるゝの意あり。一切の事に通ずる意あり。人より疑はるゝ意あり。此點に注意すれば吉なるの意がある。

### 六五。厥孚。交如。威如。吉。

〔讀方〕 六五は厥れ孚あり。交如す。威如す。吉なり。

〔大意〕 此の爻は天子の位であり而も陰である。其の誠がある。殊に陽の位に居る所から見ると云ふと威嚴もあり。能く多くの人を心服せしめるとが出来る。故に厥れ孚あり交如す威如すといふ。交如は多くの人に交ることと云ふ。

〔占考〕 人を服するの意がある。人の集まる意味がある。

### 上九。自天祐之。吉无不利。

〔讀方〕 上九は天より之を祐く。吉にして利あらざるなし。

〔大意〕 此の爻は大有の時に當つて位なきの地位にある。一番上の爻即ち第六本目は凡て位がないのである。今上九は此の地位にあつて六五に接近して居る。而も陽であつて離の卦にあるから明かなるものと云はなければならぬ。天より之を祐く吉にして利あらざるなしと云ふ所以である。

〔占考〕 其の行が善くして天祐を受くるの意味がある。占ひの上から云へば先づ以て善いものと云はなければならぬ。



謙亨。君子有終。



〔讀方〕 謙は亨る。君子終りあり。

〔大意〕 此の卦は山が地の下にある。高かるべきものが低くなつて居る。又卦の徳から云へば下は止まり上は從順である。止まつて從順であるから謙遜と云ふ意味になる。此の謙遜の美德を有つて居りさへすれば一切萬事亨らざることはない。終りを完うする所以であるからそこで「亨る君子終りあり」と云ふたのである。

〔占考〕 謙は謙遜の意味である。山は高かるべきもの。今地に下つて居るのであるから人に屈する意味がある。又人に頼る意味がある。自立することは出来ないものである。又坤の婦人が艮の少男と相ひ合つて居るのであるから少年も淫奔であり婦人も亦淫奔である意味がある。中心美德があるから其の終りを完うすることが出来る意味がある。けれども之とても謙の徳がなければ駄目である。總て人に依るのであるから己れの任に適はないといふ意味がある。見はれざる意がある。進まざる意がある。下りて勞するの意がある。

初六。謙々。君子用涉大川吉。

〔讀方〕 初六は謙々す。君子大川を渉るに用ふ。吉なり。

〔大意〕 此の爻は陰で陽の位に居るけれども最も低い。謙の徳を有つて居るものと云ふべきである。此の徳を體して行く處の君子であれば必ず大川を渉るに用ひても吉なるのである。

〔占考〕 謙々の徳を以て萬難を排し得るの意味がある。若し謙々の徳がなければ萬難を排することは出来ない。

六一。鳴謙。貞吉。

〔讀方〕 六二は鳴謙す。貞にして吉なり。

〔大意〕 此の爻は陰で以て陰の位にあるから最も謙遜の甚しいものである。其の聲に現はれるが故に鳴謙すと云ふ。貞にして吉なる所以である。

〔占考〕 謙遜して上に従ふの意味がある。此點に於て吉を得ることが出来る。



九三。勞謙。君子有終。吉。

〔讀方〕 九三は勞謙す。君子終あり。吉なり。

〔大意〕 此の爻は陽を以て陽の位にあり過剛不中の嫌はあるけれども能く陰を率いて居る。謙遜して苦勞するものと言はなければならぬ。そこで勞謙すと云ふ。此の心を以てすれば君子の終りあることは固よりであつて吉なる所以である。

〔占考〕 多くの人を統御し大業をなして苦勞する意味がある。吉を得ることが出来る。

六四。无不利。撝謙。

〔讀方〕 六四は利からざるなし。謙を撝す。

〔大意〕 此の爻は陰で陰の位にあるから何等成すとの出來ないものである。九三と云ふ賢人の上に居るけれども到る處に謙の徳を發揮して居るから善くないと云ふことはない。撝の字は應ぐと云ふ意味である。即ち發揮する意味である。

〔占考〕 己れは爲すと能はず。下の賢人に下るの意がある。之に頼つて吉なるの意がある。

六五。不富。以其鄰。利用侵伐。无不利。

〔讀方〕 六五は富まず。其の鄰を以てす。侵伐を用ふるに利し。利からざるなし。

〔大意〕 此の爻は陰で陽の位に居るから非常に美德のあるものである。此の美德を以て侵伐すれば悪いと云ふことはない。故に侵伐を用ふるに利し利からざるなしと云ふて居る。富まず其の鄰を以てすと云ふことは六四と上六と云ふ二つのものを引き連れて共に謙遜して以て九三に下ると云ふ意味である。

〔占考〕 此の様な謙の徳を以てすれば必ず衆人を得るの意味がある。事を行つて吉なる意味がある。けれども處世上道德上の訓戒として云へば是丈の徳が



あつてやれば宜い。徳がなくてやれば勿論宜くないのである。

### 上六。鳴謙。利用行師征邑國。

〔讀方〕 上六は鳴謙す。師を行り邑國を征するに用ふるに利し。

〔大意〕 此の爻は陰で下の九三に應じて居る。故に鳴謙と云ふ。謙が聲に現はれたのである。此の心を以てすれば師を起して邑國を征しても差支ない。此邑國を征すると云ふのは六五は天子の位であるし上六は無位の地位であるから幾らか狭いのである。

〔占考〕 賢人に従へば吉なる意味がある。事を行つて吉なるの意味がある。



### 豫。利建侯行師。

〔讀方〕 豫は侯を建て師を行るに利し。

〔大意〕 此の卦は下が從順にして上が動いて居る。從順にして動いて居るから必ず和樂するに違ひない。又五陰が一陽に從つて居るから此の處から云つても和樂の意味がある。故に卦を名けて豫と云ふ。豫は和樂と云ふことである。和樂する時に當つては何等か相當の道を以て成す所がなければ破れる。故に侯を建て師を行るに利しと云つて相當の人物を立て、一切を處置しなければならぬと云つたのである。

〔占考〕 此の卦は雷が地の上に出て居るのであるから何事か成さんとするものである。けれども未だ大に成すには足らない。地面の上に出て動いて居るものであるから萬事安からざる意味がある。事を新たにしなければならぬ。地面の上で躍つて居る意味がある。即ち運動するとか練習するとか云ふやうな類である。又病氣にすれば體外に物が出來る意味がある。又怠る心があるから注意すべきである。主人弱くして宰強きの意あり。

### 初六。鳴豫。凶。

〔讀方〕 初六は鳴豫す。凶なり。



〔大意〕 此の爻は陰で陽の位に在り。上に九四の應爻がある。初六は之と應じて居るから喜んで居るものといふことが出来る。聲に現はれる。故に鳴豫すと云ふ。陰にして上の應爻を以て喜ぶ様では凶なること知るべきである。

〔占考〕 人に頼るの意味がある。上に強援がある。占ひの上から云へば吉なるのである。けれども其の儘に心を許すから遂に凶を招くのである。

六二。介于石。不終日。貞吉。

〔讀方〕 六二は石に介す。日を終へず。貞にして吉なり。

〔大意〕 此の爻は陰で陰の位に居り且つ中正であるから樂しむと云つても其の度を過ぐすことはない。故に石に介すと云ふ。石の間に夾まつて居るが如くに安りに逸樂に耽ることはないのである。又日を終へすと云ふのは夜遅くまで遊んだり二日も三日も流連荒亡の遊びをすることはないのである。故に貞にして吉である。

〔占考〕 自ら守ることが極めて固き意味がある。之に依つて吉なるの意味がある。

六三。盱豫。悔遲有悔。

〔讀方〕 六三は盱豫す。悔遅ければ悔あり。

〔大意〕 此の爻は陰で三に居るから不中不正である。上九四に近い。九四は群陰の歸する所であり六三は之に近いものである。九四を見て喜んで居る。此の様な心であつたならば必ず悪いことが来る。早く後悔せよ、若し後悔するところが遅ければ本當の後悔になつてしまふと云ふのが悔遅ければ悔ありと云ふ所以である。

〔占考〕 他人を見て逸樂するの意味がある。不相應の驕奢をなす意味がある。

九四。由豫。大有得。勿疑。朋盍簪。

〔讀方〕 九四は由豫す。大に得ることあり。疑ふこと勿れ。朋盍簪す。

〔大意〕 此の爻は一の陽が群陰の主人となつて居る。群陰が皆之に依つて和樂して居る。故に由豫と云ふ。九四に由りて樂しむのである。而も多くの陰が己



れに従つて來るからして得ることあり。疑ふ必要はないといふのである。群陰が皆集まつて來るから朋盍簪すと云ふ。盍簪と云ふ簪は髪を集める道具である。そこで集まる意味となる。盍の字は合せると云ふことであるから合せ集まる意味である。

〔占考〕衆人が己れに依つて和樂する意味がある。衆望を得るの意味がある。人に長となるの意味がある。

### 六五。貞疾。恒不死。

〔讀方〕六五は貞にして疾む。恒に死せず。

〔大意〕此爻は陰で天子の位に居り下の宰相が一身に信望を負ふて居る。己れは何等成す所がない。けれども良い宰相であるから決して之を斥ける必要はない。將に正しきを以て自ら守るべきである。故に貞にして疾むといふ。疾むと云ふのは不愉快な感情を有つて居り而も之を他に現はさないことを云ふのである。衆の如くであれば即ち其の恒を得て死ぬまでには至らないと云ふのである。

のである。

〔占考〕大臣權力を専らにして己れは不愉快を懐くの意味がある。僅かに其の地位を失はないと云ふ意味がある。

### 上六。冥豫。成有渝。无咎。

〔讀方〕上六は冥豫す。成るも渝ることあれば咎なし。

〔大意〕此の爻は陰で陰の位に居り且つ又和樂の極にあるからして殆んど盲目的に喜んで居るものである。故に冥豫と云ふ。如何ともすることは出来ないけれども若し心機一轉して之れではならんと思ふ様になれば則ち咎ないことが出来るのである。「成るもは冥豫が出来上つたと云ふことである。渝ることありと云ふのは心機一轉することを云ふのである。

〔占考〕逸樂に耽り如何ともすべからざる意味がある。けれども處世上道徳上の教から云へば此の心を變へさへすれば宜いと云ふのである。悔悟の意味がある。





震下  
兌上

隨。元亨利貞。无咎。

〔讀方〕 隨は元に亨る。貞に利し。咎なし。

〔大意〕 此の卦は下に雷があり上に澤がある。雷を動かさず澤を喜ぶとなす。動いて喜ぶのであるから人に従つて喜ぶのである。故に卦を名けて隨となす。動いて喜ぶのであるからそこで元に亨る貞に利しと云ふてある。咎のない所以である。

〔占考〕 此の卦は我が動いて彼が喜ぶのである。我が彼に隨從するの意味がある。故に我れの方が總て動く意味がある。動いて喜んで居る意味がある。又震は東兌は西であるから東西を意味して居る。東西相ひ貫通する意がある。總て通ずる意味である。女難がある。何故女難のあることが分るか云ふと六二に小婦に係り丈夫を失ふと云ふこともあり一體此の卦は人に隨ふと云ふ所から女の氣の強いことを意味して居るのである。動いて後に悦ぶ意味があ

初九。官有渝。貞吉。出門交。有功。

〔讀方〕 初九は官渝るとあり。貞なれば吉なり。門を出で、交はれば功あり。

〔大意〕 此の爻は陽で陽の位に在り且つ震の主人公である。隨の時に當つて屢々其の仕へる處を變へるものである。けれども素より悪い心でないから必ず成功することが出来るのである。官と云ふのは仕へる處を云ふたのである。門を出で、交ると云ふたのは公明正大なる交りをする事である。

〔占考〕 任所を變へ、又遊學するの意味がある。

六一。係小子。失丈夫。

〔讀方〕 六二は小子に係り。丈夫を失ふ。

〔大意〕 此の爻は陰で陰の位にあるから極めて從順なるものであるけれども、而も初九に從つて上の九五を失ふの意味がある。故に小子に係り丈夫を失ふと云ふ。



〔占考〕一人のことに心を迷はして其の正應を失ふ意味がある。占ひの上から云へば目前のことに拘泥して大局を忘れるものと云はなければならぬ。婚姻の意味がある。

六三。係丈夫。失小子。隨有求。得利居貞。

〔讀方〕六三は丈夫に係りて小子を失ふ。隨つて求むることあり。得。貞に居るに利し。

〔大意〕此の爻は陰で三に居るから不中不正のものである。然るに上九四に隨ひ上六と正應でない。是は丈夫に係つて小子を失ふ者である。九四に隨つて求むれば得ざる所はない。唯正しくするのが宜いからして貞に居るに利しと云ふのである。

〔占考〕大なる者に隨ふの意味がある。人に依りて物を得るの意味がある。

九四。隨有獲。貞凶。有孚。在道以明。何咎。

〔讀方〕九四は隨つて獲るとあれば貞なれども凶なり。孚あり。道に在りて以て明かなれば何の咎あらん。

〔大意〕此の爻は隨の時にあつて陽を以て陰の位にある。極めて優しいものである。六三は己れに隨つて居るから意外に得る所がある。けれども六三は悪いものであるから之を得て喜んで居る様では凶なると知るべきである。故に隨つて獲るとあれば貞なれども凶と云ふ。然らば如何にすれば宜いかと云ふに九四は孚あるものである。其の孚を推衍して事理の上に於て明かにして居れば差支ないのである。即ち九五は君であるから九五に隨つて居りさへすれば宜いのである。

〔占考〕意外なる幸福があるけれども必ずしも正當なるものではないと云ふ意味がある。己れの隨ふ所を明かにすべき意味がある。

九五。孚于嘉。吉。

〔讀方〕九五は嘉に孚あり。吉なり。



〔大意〕此の爻は天子の位に在るものであるが己れを虚しくして以て上六に従つて居る。随ふべくして随ひ随ふべからずして止むのである。今上六に従ふべきことを見て之に従つて居るから必ず吉である。嘉に孚あると云ふのは嘉偶と云ふことで宜き相手と云ふことであつて上六を指したものである。

〔占考〕随ふべきものを得て之に従ふて吉なるの意味がある。

上六。拘係之。乃從維之。王用亨于西山。

〔讀方〕上六は之を拘係す。乃ち從つて之に維がる。王用つて西山に亨す。

〔大意〕此の爻は陰で隨の極に居り、九五と相愛して居る。兩者の間は固結して解くことが出来ない。そこで之に拘係し従つて之に維がると云ふて居る。斯の如くであれば天下以て治まるべきである。故に王用て西山に亨すと云つて天下の次第に統一しかけたことを示めたのである。

〔占考〕人と相ひ交り固結して解けざる意味がある。けれども其の人を統一して大事業を成すの意味がある。

巽下 艮上

蠱。元亨。利涉大川。先甲三日。後甲三日。

〔讀方〕蠱は元に亨る。大川を渉るに利し。甲に先つ三日。甲に後る三日。

〔大意〕此の卦は風が山に向つて當ると云ふ意味である。進むことが出来ないで歸つて来る。又亂れる。そこで名けて蠱と云ふ。蠱は事があると云ふ意味である。既に事があるのであるから亂れて居る。亂れて居るものは必ず治まることがある。故に元に亨ると云ふ。活動しなければならぬから大川を渉るに利すと云ふ。大事件を治めやうと思つたならば必ず豫め準備をしなければならぬ。事件が始まつてから後にも細心の注意を拂はなくてはならない。甲は十干の始め日の始めである。即ち事の始めを示したものである。甲に先つ三日と云ふのは即ち事の起らない前に注意せよと云ふことである。甲に後る三日と云ふのは始めてから後三日位は細心の注意を要すと云ふことを云ふたのである。此の卦は事があるのであるからそこで事を處するの注意を述



べたのである。

〔占考〕 蠱は破るゝ意味である。又惑はす意味もある。風が山に當つて進むことが出来なから總ての目的は達せられない意味がある。大に活動して始めて之を達することの出来る意味がある。巽を長女となし艮を少男となす。長女が少男を惑はすの意味もある。又欺くの意味もある。諂ふ意味もある。従て一面より言へば迷ふ意味もある。又事を治むるの意味もある。又損害を蒙るの意味もある。之を病氣にして見れば艮を留まるとなすから中に鬱氣が滯ふるの意味がある。或は血液の循環の良くない意味もある。新たに治めるの卦であるから心を勞すること少くない。けれども成功の望みはある。又細心の注意を拂へば事を成しても大に成る意味がある。又破れたるを屬ふ意味がある。

初六。幹父之蠱。有子。考无咎。厲終吉。

〔占考〕 初六は父の蠱を幹す。子有り。考無咎なし。厲ければ終に吉なし。

〔大意〕 此の爻は陰で陽の位に居り且つ巽の主人公である。遜順にして志が強い。且つ卦の初めに在る。其の事件たるや甚だ小さい。子として父親の事を掌り敢て父を辱しむるやうなことはない。従て父も咎ないことが出来る。そこで父の蠱を幹す。子有り。考無咎なしと云ふ。考は父を云つたのである。然りと雖も常に厲いといふ志を有つて居なければならぬ。故に厲ければ終に吉なりと云ふたのである。

〔占考〕 主として父の志を成就するの意味がある。父をして辱しめざるの意味がある。

九二。幹母之蠱。不可貞。

〔占考〕 九二は母の蠱を幹す。貞にすべからず。

〔大意〕 此の爻は陽で陰の位に居り且つ下卦の中であり、上六五に應じて居る。六五は母である。九二は陽で其の事を掌つて居るから長男が母親の事を掌つて居るやうな意味がある。母親に仕へる道は餘り突劍呑であつてはいけな



から貞にすべからずと戒めたのである。

〔占考〕 人の事を掌るの意味がある。人に従へば則ち吉なるの意味がある。

九三。幹父之蠱。小有悔。无大咎。

〔讀方〕 九三は父の蠱を幹す。小く悔いあるも大なる咎なし。

〔大意〕 此の爻は蠱の半ばにあるからして事件が既に大きい。而も過剛の才がある。故に父の事をするに當つても必ずやり過ぎることがあるから小しは後悔することがあるけれども大なる咎はない。

〔占考〕 能く仕事を成就するの意味がある。多少は後悔するの意味がある。大なる不幸はない。

六四。裕父之蠱。往見吝。

〔讀方〕 六四は父の蠱を裕す。往けば吝を見る。

〔大意〕 此の爻は陰で陰の位にあるから餘り優し過ぎて何等の仕事をも成すこ

とは出来ない。此の蠱にして往いたならば逆も亂れて居る時勢を挽回することは出来ないから往けば吝を見ると云ふたのである。裕すと云ふのは寛容の意味であつて父の事を掌ることの出来ない意味を示したものである。

〔占考〕 柔和に過ぎて其の事を破るの意味がある。けれども柔和でなければ大に成功することが出来るのである。占つて此の爻が出たからと云つて直ちに駄目だとは言ひ難い。九三のやうな人が占つて此の爻が出るかも知れない。其の時には矢張り九三の方に従はなければならぬ。けれども是は處世上道徳上の教である。若し純然たる占ひの上から云へば矢張り悪いと云ふ意味になる。

六五。幹父之蠱。用譽。

〔讀方〕 六五は父の蠱を幹す。用て譽れあり。

〔大意〕 此の爻は陰で陽の位にあるから剛と柔との二つの徳を相ひ用ひて居るものである。祖先傳來の仕事を受けても大に之をやり遂げることが出来るか



ら父の蠱を幹す。用て譽ありと云ふてある。

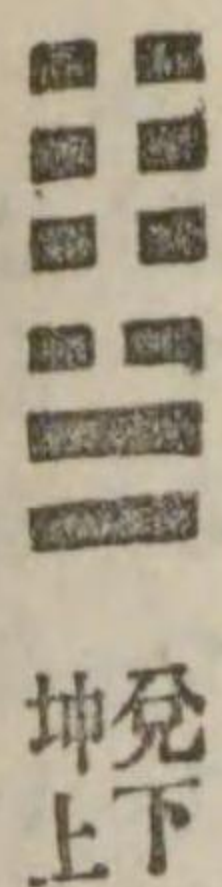
〔占考〕 一時に開展するの意がある。大に譽れを得るの意がある。

上九。不事王侯。高尚其事。

〔讀方〕 上九は王侯に事へず。其の事を高尚にす。

〔大意〕 此の爻は陽を以て陰の位に居るから世事の外に離れ心を風雲に寄するの意がある。故に王侯に事へず其の事を高尚にすと云ふたのである。

〔占考〕 世の中を離れるの意味がある。世の中は今亂れて居るの意味がある。上九一爻に付て云へば王侯に事へず其の事を高尚にするのであるが時世はどわかと云ふと亂れて居るのである。亂れて居るから自分一人が他に退いて居るのである。易を見ても唯其の爻だけを見るのでは意味が甚だ狭い。



臨。元亨。利貞。至于八月有凶。

〔讀方〕 臨は元亨に亨る。貞に利し。八月に至つて凶あり。

〔大意〕 此の卦は陽が次第に長せんとして居る。故に臨と云ふ。臨は臨むと云ふので今將に盛んにならんとする所を云ふのである。或は澤の上に地があるから地が澤に臨んで居ると云ふ意味にも解せられる。陽が長じて陰が衰へるのであるから元亨に亨る貞に利すと云ふ。けれども陽が長じてしまふと云ふと遂には又衰へることもある。そこで八月に至つて凶ありと戒めて居る。八月と云ふのは何處から来たかと云ふと此の卦は二陽が復して居るのであるから正月の卦である。二月三月四月五月と云ふと乾の卦になつてしまふ。六月になると一陰が始めて下に生ずる。天風垢の卦となる。七月になると云ふと天山遯の卦になる。八月になると天地否の卦になる。そこで八月に至つて凶ありと云つて戒めたのである。

〔占考〕 臨は大なりとも云ふて次第に大きくならんとする意味もある。けれども今の處大きくないのであるから不平の氣がある。思ふ所は未だ俄かに望むことは出来ない。又臨は近いと云ふ意味がある。故に人は必ず來ると云ふ意



味にもなる。我が口を以て説けば彼が従ふ意味がある。次第に繁榮する意味がある。又病氣にして見れば坤を腹となす。澤を水となすから腹中に水があるといふ意味がある。又女が男に親しむの意味もある。男は必ずしも女に親しまざるの意味がある。

初九咸臨貞吉。

〔讀方〕 初九は咸臨す。貞にして吉なり。

〔大意〕 此の爻は陽の將に盛んにならうとする時に當つて陽で陽の位に在る。而も六四に應じて居る。是は陽を以て感じて陰に臨むやうなものである。故に咸臨すと云ふ。陰を感化する意味がある。其の位に居つて陰を感化するのであるから貞にして吉なりと云ふのである。

〔占考〕 人を感ずる意味がある。其の家を出でずして上の人を奉り服するの意味がある。

九二咸臨吉无不利。

〔讀方〕 九二は咸臨す。吉にして利からざることをなし。

〔大意〕 此の爻は初九と同じ意味である。其の上下卦の中央にあり。直接に上四陰と接して居る。であるから四陰が悉く九二に歸服す。そこで九二は咸臨す。吉にして利からざるをなしと云ふて居る。

〔占考〕 衆人が歸服するの意味がある。大に其の目的を達することの出来る意味がある。

六三甘臨无攸利既憂之无咎。

〔讀方〕 六三は甘臨す。利する攸なし。既に之を憂へば咎なし。

〔大意〕 此の爻は臨の時に當つて不中不正である。其の心が正しくない。其の陽に接するや甚だ穩かでない。甘言を以て接するの意味がある。そこで甘臨す。利する攸なし。是ではならぬと云つて心配すれば咎ないことが出来る。故に既に之を憂へば咎なしと云ふ。

〔占考〕 甘言を以て人に臨むで失敗するの意味がある。媚を人に献ずるの意味



がある。けれども處世上道徳上の教として見れば之を改むれば則ち吉なると  
が出来るのである。

六四。至臨。无咎。

〔讀方〕 六四は至臨す。咎なし。

〔大意〕 此の爻は陰で陰の位に居るから極めて優しいものである。人に接する  
には此の位優しい志がなければならぬ。大なる仕事をするに云ふことは出  
来ないけれども此の志のあるだけが大なる長所である。此の志だけが大に取  
るべきである。故に曰く。至臨す。咎なし。至臨の至の字は衷心を以て臨む  
意味である。

〔占考〕 誠を以て人を感ずるの意味がある。けれども大なる事業をなすことは  
出来ない。

六五。知臨。大君之宜。吉。

〔讀方〕 六五は知臨す。大君の宜きなり。吉なり。

〔大意〕 此の爻は陰で陽の位に居るから決して愚なる者ではない。故に知識を  
以て臨むと云ふのである。君の君たる所以は實に此處にある。知臨す。大君  
の宜きなり。吉なりといふ所以である。

〔占考〕 人を用ひるに當つて其の宜きを得るの意味がある。人の助けを得るの  
意味がある。

上六。敦臨。吉无咎。

〔讀方〕 上六は敦臨す。吉にして咎なし。

〔大意〕 此の爻は陰で陰の位にある。是は敦い精神を以て人に臨むものである  
から敦臨す吉にして咎なしと云ふたのである。

〔占考〕 人が歸服するの意味がある。尊きを忘れて人に交はるの意味がある。  
成功の意味がある。



坤下  
巽上



觀盥而不薦有孚顒若

〔讀方〕 觀は盥して薦せず。孚ありて顒若たり。

〔大意〕 此の卦は上に二陽があり。下に四陰がある。四陰が眺めて居る。四陰が二陽を觀て居るの意味がある。故に名けて觀と云ふ。四陰が眺めて居る。其れ等四陰の様子は顒若として居る。顒若と云ふのは顒は大なる頭で若は付け言葉であるから頭が上を向いて居ることを云ふたのである。然も此の時に當つては觀る人の心持は最も誠の精神に充ちて居る。其の誠の精神の滿ちて居る状態は祭りの際に水で手を洗ひ酒を地に注いで神を下さうとして居る時のやうなものである。此の時までは誠が滿ちて居るけれども一度神様に品物を献じてしまふ。之を薦と云ふ。其の後にになると云ふと最早誠の精神がなくなつてしまふ。今此の卦の状態を見ると云ふと能く人を感動せしむるに足る。二陽が上にあつて衆陰の見る所となつて居るから衆陰も亦二陽を仰ぎ見て居る。誠の精神が十分滿ちて居るから盥して薦せずで手を洗つて神を下しただけで、まだ食物を進め

ない状態であると云ふのである。孚有つて顒若たりと附加へて居るのも同じ意味である。詰り卦の性質が如何にも誠に滿ちて居ると云ふことを云ふたのである。

〔占考〕 此の卦は風が地の上に走つて居るのであるから凡て物が定らない意味がある。又下から陽氣が起つて來るのであるから雲が急に卷いて來るやうな意味もある。又上に陽があるから外觀は甚だ宜いけれども中が必ずしも之に伴はない意味がある。上卦巽は利に近いて市三倍と云つて非常に利益あるの意味がある。坤は又吝嗇と云ふ意味があるから蓄財の意味がある。だから小人にして見れば吝嗇であり大人にして見れば人を欺いても物を取らうと云ふのである。能く時を觀るとか變を窺ふとか云ふやうな意味がある。之を病氣にして見れば陽氣が上り詰めたのであるから道上の意味がある。

初六童觀小人无咎君子吝

〔讀方〕 初六は童觀す。小人は咎なし。君子は吝なり。



〔大意〕 此の爻は陰で一番初めに在る。凡ての陰が皆二陽を見て居るのであるけれども自分一人は遠くして之を観ることが出来ない。小人ならばそれでも差支ないけれども君子としては斯の如きことがあつてはならない。そこで童觀すと云ふ。子供の見ると同じことであると云ふのである。

〔占考〕 観ること明かならざる意味がある。其の奥底に達すること能はざる意味がある。小人の道であつて君子の道ではないのである。

六一。闕觀利女貞。

〔讀方〕 六二は闕觀す。女の貞に利し。

〔大意〕 此の爻は觀の時に當つて陰で陰の位にあり極めて優しいものであつて、且つ九五に應じて居る。是は公然と陽を見るものでなくして窺かに陽を見やうとするものであるから闕ひ觀ると云つたのである。而も是れ婦人の道であつて男子の道ではない。故に女の貞に利しと云ふ。

〔占考〕 觀る所甚だ微い意味がある。又人の氣を窺ひ氣に入らるゝ意味がある。

六三。觀我生進退。

〔讀方〕 六三是我が生を觀て進退す。

〔大意〕 此の爻は陰で下卦の上にあるから九五に近いけれども而も九五に服して居る譯ではない。進退未だ決せざる所がある。故に曰く。我が生を觀て進退すと。我が生と云ふのは即ち生活と云ふことである。自分の生活に依りて或は進むこともあり或は退くともある。三自身に是丈の智慧はあるのである。

〔占考〕 進むも退くもまだ明かでないといふ意味がある。

六四。觀國之光利用賓于王。

〔讀方〕 六四は國の光を觀る。王に賓たるに用ふるに利し

〔大意〕 此の爻は陰で陰の位に居るから極めて優しいものである。賢主に接して寵用せられるものである。そこで國の光を觀る。王に賓たるに用ふるに利しといふ。



〔占考〕 大に用ひられる意味がある。人に信用せらるの意味がある。往いて可なるの意味がある。

九五。觀我生。君子无咎。

〔讀方〕 九五は我生を觀る。君子は咎なし。

〔大意〕 此の爻は陽で陽の位にあるから極めて強いものである。而も四陰の觀望する所である。其の行ふ所を見て何等恥づる處がなければ差支ないのである。そこで我生を觀る。君子は咎なしと云ふ。詰り君子ならば咎がないと云ふのである。

〔占考〕 人より仰がれる意味がある。

上九。觀其生。君子无咎。

〔讀方〕 上九は其の生を觀る。君子は咎なし。

〔大意〕 此の爻は陽で高き所に在り九五と同じく多くの陰の仰ぎ見る所である。とくと其の行ひを戒めて君子たるに背いてはならぬ。其の生と云ふのは九五よりも少し軽いから其の」と云ふたのである。矢張り上九自身のことを指したものである。

〔占考〕 人が仰ぐの意味がある。吉なるの意味がある。



震下  
離上

噬嗑。亨。利用獄。

〔讀方〕 噬嗑は亨る。獄を用ふるに利し。

〔大意〕 此の卦は上と下とに陽があつて中に一陽がある。口の中に物のあるやうな形であるから名けて噬嗑と云ふ。噬嗑は噛み合せると云ふ意味である。噛み合せるのであるから之を消化してしまへば宜いのである。又下の卦は動いて上の卦は明かである。動くに明かなることを以てするのであるから必ず能く消化することが出来る。殊に裁判などに於ては最も宜いのである。故に



亨る獄を用ふるに利しと云ふて居る。

〔占考〕物を噬み碎いて始めて治まるの意味がある。動くに明かなるを以てするのであるから、丁度燈を點じて道を往くの類である。けれども火と雷とは共に猛烈なものであつて俄かに消え易いから凡ての事が永續せざるの意味がある。熱氣の甚だしい意味もある。合する意味もある。裁判する意味がある。仲介人があつて喧嘩を調和するの意味がある。噬嗑は食ふ意味であるから、亦養ふと云ふ意味もある。噬み合するのであるから交易する意味もある。喧嘩と云ふ意味もある。大に動いて其の宜しきに合するの意味がある。従つて事成るべきの意味がある。

初九。履校。滅趾。无咎。

〔讀方〕初九は校を履み。趾を滅す。咎なし。

〔大意〕噬嗑の六爻には皆裁判の道が説いてある。今初九と上九とは裁判せらるる人に付て云ふたのである。則ち刑罰を受けける人に付て言つてある。初九

は陽で陽の位にあるけれど其の位が微だから罪も小さく随つて罰も小さい。足枷を嵌められて足の指の上に僅かに載つた位のものである。罰に逢つても改めると云ふ氣があるからそこで咎なしと云ふのである。校を履むと云ふのは足枷を嵌められることを云ふたのである。

〔占考〕罪の小なるの意味がある。進むことの出来ない意味がある。今にして改めれば則ち可なるの意味がある。

六二。噬膚。滅鼻。无咎。

〔讀方〕六二は膚を噬み。鼻を滅す。咎なし。

〔大意〕此の爻は陰で陰の位にあるから極めて優しいものである。此の優しい正しい心を以て裁判すれば人も亦服する。人の服すること恰も軟かい肉を噬んで鼻まで其の肉の中に追入つてしまふやうなものである。人の心に入ること比較的深いのを云ふたのである。咎なき所以である。膚を噬み鼻を滅すると云ふのは詰り形容である。



〔占考〕 人の服する意味がある。又其の事は小さく簡單なるの意味がある。

六三。噬腊肉。遇毒。小吝。无咎。

〔讀方〕 六三は腊肉を噬み。毒に遇ふ。小く吝なれども咎なし。

〔大意〕 此の爻は不中不正であるから此の心を以て裁判をしやうと思つても人は服さない。硬い肉を食つたやうなものである。却つて毒に遇ふ。故に曰く。腊肉を噬み毒に遇ふ。腊肉と云ふのは乾かした肉である。吝なる所以である。けれども六三は陰で陽の位に居るから妄りに動くものではない。故に少しく吝なれども咎ないことが出来るのである。

〔占考〕 事は成り難さの意味がある。却つて毒に遇ふの意味がある。

九四。噬乾肺。得金矢。利艱貞。吉。

〔讀方〕 九四は乾肺を噬む。金矢を得。艱貞に利し。吉なり。

〔大意〕 此の爻は陽で陰の位に居るから心が堅しいものである。裁判するには最も良いけれども地位が高くになると裁判も亦六ヶ敷くなる。そこで乾肺を噬むと云ふ。硬い肉を噬むと云ふことである。けれども裁判せられる方は之に心服して金の矢を入れることがある。即ち誓ひを立てると云ふことである。其の事の艱難なることを思つて正しくすれば宜い。そこで艱貞に利し吉なりと云ふて居る。

〔占考〕 成功の意味がある。人より物を得るの意味がある。

六五。噬乾肉。得黄金。贞厲无咎。

〔讀方〕 六五は乾肉を噬み。黄金を得。貞厲なれば咎なし。

〔大意〕 此の爻は陰で陽の位に居り先づ宜いものである。且つ離の卦の中央に居るから甚だ明かである。之を以て裁判すれば人は服せざるものはない。必ず金を得るに違ひない。故に乾肉を噬み黄金を得ると云ふ。貞にして厲いといふことを心配して居れば即ち咎がない。

〔占考〕 人の服する意味もある。功成るの意味もある。



上九。何校。滅耳。凶。

〔讀方〕 上九は校を何ふ。耳を滅す。凶なり。

〔大意〕 此の爻は陽で一番上にあるから初九に比べれば惡の大なるものであつて重罰に處せられる。故に校を何ふて耳を滅するに至る。頭に載つて居らないで耳まで隠れてしまふ位にひどい。校は足枷首枷の總稱であるから上の方なれば首枷下の方なれば足枷である。

〔占考〕 罪を重ねるの意味がある。凶なる意味がある。けれども處世上道德上の教から云へば又之を變ずることも出来るのである。



離上

賁亨。小利有攸往。

〔讀方〕 賁は亨る。小く往く攸あるに利し。  
〔大意〕 此の卦は山の下に火がある。即ち美しい意味がある。又明かにして止

まつて居るとも云へる。従つて賁と名けたのである。賁は飾りである。飾りを事とすれば必ず破れてしまふ。内聰明にして外止まて居るのであるから徒らに飾りのみを事とするものではない。そこで亨ると云ふのである。けれども卦全體より云へば活動の意味がない。そこで大に仕事をすることは出来な

いけれども少しはやつても宜いと云ふのである。

〔占考〕 此の卦は飾りの意味であるからして外ばかり美しくして中の足りない意味がある。其の表面を見ると如何にも盛んであるが内實はさうでないといふ意味がある。禮儀に拘泥して精神の愚かなるが如き意味がある。又僞る意味がある。或は噓嘘と同じく中に一本の陽があつて上下二陰を隔て、居るから人と相ひ和せざるの意味がある。仕事をしない方が宜い。けれども又智慮があつて行ひは篤實であると云ふ意味もある。又火が山の下に没して居るから夜と云ふ意味がある。外は派手であるけれども内は貧乏であると云ふ意味もある。總て飾りを愛するのであるから花鳥や風月や歌俳諧などを好む意味がある。餘り飾りばかりを事とするものであるから何か精神に缺點がある



と云ふことを疑はなければならぬ。凡て小なるに宜しく大なるに宜しくない。

初九。賁其趾。舍車而徒。

〔讀方〕 初九は其の趾を賁る。車を捨てて徒す。

〔大意〕 此の爻は陽で陽の位にあつて上六四に應じて居る。其の志正しくして徒らに外飾を事とすることなく。往くべき所を往かんとするものである。故に其趾を賁ると云ふ。趾は足である。足を飾ると云ふのは行ひを慎むと云ふのである。而も車などに乗るやうなことをしないで徒歩で行く。其の志の確固たることを見ること出来る。

〔占考〕 着實であるから成功するの意味がある。處世上道德上の訓戒として見れば志が着實なるの意がある。分を守つて動かざるの意がある。占ひの上より云へば着くとして歩を進めるの意がある。

六二。賁其須。

〔讀方〕 六二は其の須を賁る。

〔大意〕 此の爻は中正の徳を以て離と云ふ文明の卦の主人公である。上に助けがない。三と相親んで居る。三に従つて行動するものである。己れの須が鬚に従つて動くが如くである。故に其の須を賁ると云ふてある。

〔占考〕 己れの目上の人に從ふの意味がある。之に従へば吉なるものである。

九三。賁如。濡如。永貞吉。

〔讀方〕 九三は賁如す。濡如す。永貞なれば吉なり。

〔大意〕 此の爻は過剛不中で離の終りにある。そこで賁如すと云ふ。即ち飾りが十分であると云ふことを去ふたのである。けれども其の飾りが濡れて居ると云ふのは餘り飾り過ぎるものであるから遂に失敗することがあるのを云ふたのである。それであるから永貞なれば吉なりと云つて戒めてある。

〔占考〕 人より飾らるゝ意味がある。けれども其の飾りに過ぎて却つて凶なるの意味がある。



六四。賁如。皤如。白馬翰如。匪寇婚媾。

〔讀方〕 六四は賁如す。皤如す。白馬翰如たり。寇するに匪す。婚媾す。

〔大意〕 此の爻は賁の時にあつて柔に過ぎて居る。而も初九に應ずる。唯九三の爲めに妨害せられる。遂に髮の毛が白くなるやうなこともある。そこで賁如す皤如すと云ふ。けれども初九に會はんとするの志は極めて強い。恰も白馬が翰如として飛ぶやうな工合である。是は初九に對して悪いことをするのではない。唯正當なる結婚をせんとするのである。

〔占考〕 妨害するものあるの意味がある。容易に其の目的を達することの出来ない意味がある。けれども最後に達することが出来る。

六五。賁于丘園。束帛戔々。吝終吉。

〔讀方〕 六五は丘園を賁る。束帛戔々たり。吝なれども終に吉なり。

〔大意〕 此の爻は中正の徳があつて賁の時ではあるけれども外飾を專としな。努めて上九に親んで居る。上九に據りて以て天下を治めんとする意味がある。そこで丘園を賁る。束帛戔々たりと云ふ。丘園は丘や庭と云ふとで上九を指して云ふたのである。束帛は即ち絹であつて戔々は少ないことを云ふたのである。絹が少ないと云ふのは贈り物が少ないことを云ふたのである。従つて吝の誹りはあるけれども眞面目であるから終に吉なることが出来る。

〔占考〕 人より非難せられることがある。けれども親しむべき人に親しんで居れば吉なるの意味がある。

上九。白賁。无咎。

〔讀方〕 上九は白賁す。咎なし。

〔大意〕 此の爻は賁の極にあるから既に飾ると云ふやうな意味はない。極めて質朴なものである。故に白賁と云ふ。白いのは飾りのない質朴の意味である。



坤下  
艮上



剝不利有攸往。

〔讀方〕 剝は往く攸あるに利しからず。

〔大意〕 此の卦は陽が上に盡んとして居るから名けて剝と云ふ。此の卦は止まつて居る卦であるから往く所あるに利しからずと云つて何等の仕事をしてもならぬと云ふのである。又一方から見れば小人が長じて君子が退く時である。此處から見ても往く攸あるに利しからざる事が分る。

〔占考〕 小人が次第に盛んになり又女が盛んになる。大に志を行ふべきの時ではない。陰が追々長じて來て陽を追ひ蒐けるのであるから女が男を逐ふの意味がある。又着物を剝ぐと云ふ意味もある。さうかと云つて又陽氣が追々消滅してしまふのであるから霜が降つて萬木蕭條たるの意味もある。又艮を手にとするから大なる手を以て物を掻き集めると云ふ意味もある。坤を吝嗇となし、艮を止まるとなすから極めて吝嗇なりと云ふ意味もある。動物にすれば鼠が地面の上を歩く意味がある。又品物にすれば上が閉ぢてあつて下が開いて居るのである。物が落ちたり着けたりする意味がある。退いて守るに宜しい。外見は宜いけれども内が窮乏である。懦弱狼戾の意味がある。位のみ高くして幸がないと云ふ意味がある。人に仰ぎ見られる意味がある。隠遁するの意味がある。陰氣が上り詰めて陽氣が消滅するのであるから病氣にすれば極めて悪い。

初六。剝牀以足。蔑貞凶。

〔讀方〕 初六は牀を剝するに足を以てす。貞を蔑す。凶なり。

〔大意〕 此の爻は陰で剝の下に居るからまだ微なるものである。人を殺さんとする者が人の寐て居る處の牀を破る様なものである。牀を破る一番初めは先づ其の足を破るのである。此の爻の運氣は悪い。道徳的に言へば正しくない。故に床を剝するに足を以てす。貞を蔑す。凶なりと云つて居る。蔑すと云ふのは蔑ろにすると云ふことで正しい道ではないと云ふことを云ふのである。

〔占考〕 占つて此の爻が出れば悪事が漸く起つて來たものと解釋しなければな



らない。又人にして見れば因循の小人悪事を見はしたるものと見なければならぬ。

六一。剝牀以辨蔑貞凶。

〔讀方〕 六二は牀を剝するに辨を以てす。貞を蔑す。凶なり。

〔大意〕 此の爻は剝の勢が次第に強くなるのであるから牀を剝せんとして辨を破るやうなものである。辨は牀と足と上下分別する所を云ふたのである。之も正當ではない。貞を蔑す凶なりと云ふ所以である。辨は足よりも高いのである。二の位置は初六より高いのである。

〔占考〕 悪が次第に長じて來たと云ふ意味がある。

六三。剝之无咎。

〔讀方〕 六三は之を剝す。咎なし。

〔大意〕 此の爻は剝の時に當りて上九に應じて居る。陽を助けんとするものである。云はなければならぬ。能く君子に仕へる者であるから咎がないと云ふのである。

〔占考〕 他人と仲間外れになる意味がある。而も上に得られる意味がある。此の爲に却つて幸福を得るの意味がある。

六四。剝牀以膚凶。

〔讀方〕 六四は牀を剝するに膚を以てす。凶なり。

〔大意〕 六四になると云ふと剝するところが更に甚だしい。遂に牀上の人を剝する。故に膚を以てすと云ふ。膚は肉である。

〔占考〕 悪報極めて大なるの意味がある。如何ともすべからざる意味がある。

六五。貫魚以宮人寵无不利。

〔讀方〕 六五は貫魚宮人を以いて寵せしむ。利からざることなし。

〔大意〕 此の爻は五陰の下より進むの時に當り其の最上位に居る。而も五の位



に居るから多くの陰を率いて上九に仕へる意味がある。丁度皇后が多くの姫を率いて以て天子に仕へるやうなものである。之を物に譬ふれば一の串で魚を貫いたやうなものである。それであるから貫魚して宮人を以て寵せしむ利からざるなしと云ふたのである。

〔占考〕人を御する意味がある。長者に服する意味がある。女子の盛んなる意味がある。多勢を調和する意味がある。

上九。碩果不食。君子得輿。小人剝廬。

〔讀方〕上九は碩果食はれず。君子は輿を得。小人は廬を剝す。

〔大意〕此の爻は一陽が獨り存して居る。物に譬へれば丁度大なる果物が食はれずにあるやうなものである。若し君子であれば必ず多勢の人を得ることが出来る。輿と云ふのは多勢を云うたのである。小人であれば則ち家を剝すやうな工合で其の處に安んじて居ることは出来ない。〔占考〕多勢に仰がれる意味がある。能く其の任に堪ふるや否やは一に其の人にありといふべきである。止まるの意がある。落る意がある。



震下 坤上

復。亨。出入无疾。朋來无咎。反复其道。七日来复。利有攸往。

〔讀方〕復は亨る。出入疾ひなし。朋來りて咎なし。反复其道よりす。七日にして來り復す。往く攸有るに利し。

〔大意〕此の卦は下に一陽が生じて居るのであるから名けて復と云ふ。易では陰を卑しみ陽を尊ぶ。陽氣が復た初めて生じたのであるから此れ當然復るべきものが復つたのであるとして復と云つたのである。復は復であるから必ず亨らなければならぬ。天道は一方に偏することはない。陽のないこともなく、陰のないこともない。陽が長ずるに當りては何等阻害するものもない。故に曰く。出入疾なしと。陽が益々長じて來るのであるから朋來りて咎なしと云ふて居る。次第に陽が長じて來るのである。陽の來り復すと云ふのは元自然の道であるけれども、一概に復することは出来ない。そこで反复するはそ



れ道よりす。七日にして來り復すと云ふた。斯の如き時は賢人が出なければならぬ時であるから往く攸あるに利しと云ふ所以である。七日と云ふのは何であるかと云ふと、一陰初めて生ずると姤の卦になる。之から遯否觀剝坤を經て七日となるからである。

〔占考〕陽が始めて下に生じたのであるから極めて微なるものであるけれども、其の意味は極めて大なるものがある。そこで寶珠を土中に得るの意味がある。暗中一點の光を得るの意味がある。善が次第に長じて惡が次第に消するの意味がある。男子が正々堂々として進めば女子は自ら退くの意味がある。初めは困難であるけれども後には大吉を得るの意味がある。花開くの意味がある。病ひ回復に向ふの意味がある。

初九。不遠復。无祗悔。元吉。

〔讀方〕初九は遠からずして復す。悔に祗ることなし。元吉。〔大意〕此の爻は復の初めに當つて陽であるから最も迅速に復するものと云は

なければならぬ。過つても改め後悔するに至らない。故に遠からずして復す。悔に祗ることなし。元吉と云ふて居る。

〔占考〕大に發展するの意味がある。過ちを改むるの意味がある。

六二。休復。吉。

〔讀方〕六二は休復す。吉なり。

〔大意〕此の爻は中正の徳があつて能く下の初九に親しんで居る。初九の力に依つて以て復するものと云ふことが出来る。故に休復と云ふ。休は人が木の蔭に庇はれて居る形である。

〔占考〕賢人に従つて其の恩澤に浴するの意味がある。

六三。頻復。厲无咎。

〔讀方〕六三は頻復す。厲けれども咎なし。

〔大意〕此の爻は不中不正であるから或は復して見たり或は復さなかつたり甚



だ定まらざるものである。故に頻復と云ふ。けれども大勢既に復するものであるから、厲いけれども先づ咎なきことが出来る。頻は頻蹙の意味である。其の復し方が早くないのである。

〔占考〕 總て善を見たならば早く移らなければならぬ。迷つて居るやうではいけない。けれども占ひの上から云へば容易に回復しない。唯僅かに回復する意味がある。

### 六四。中行獨復。

〔讀方〕 六四は中行獨り復す。

〔大意〕 此の爻は極めて優しいものであるが、下初九と應じて居る。應すべき時に應じて其の正しき道に復るから中行獨り復すと云ふ。

〔占考〕 志操極めて堅く、且つ淨き意味がある。

### 六五。敦復。无悔。

〔讀方〕 六五は敦復す。悔いなし。

〔大意〕 此の爻は從順にして坤の主人公である。道を信ずることが敦くして次第に復するの意味がある。故に敦復と云ふ。心が敦くして復するのは復する事が遅くても後悔するに及ばない。遅いと云ふのは何故かと云ふと初九を去ること非常に遠いからである。

〔占考〕 着々として進み、遅くも大に成功をする意味がある。

### 上六。迷復。凶。有災眚。用行師。終有大敗。以其國君凶。至于十年。不克征。

〔讀方〕 上六は迷復す。凶なり。災眚あり。師を行るに用ふれば終に大敗あり。其の國君を以てすれば凶あり。十年に至りて征すること克はず。

〔大意〕 此の爻は復の時に當つて初を去ること最も遠い。且つ坤の卦の終りにある。坤は女の道である。家來の道である。然るに一番上にあるから志が甚だ驕つたものといふべきである。正しい道に復ることをしない。故に迷復す。凶ありとある。必ず咎がある。若し戦でもしやうものなら大敗あるを免かれ



ない。其國の君まで伴れて悪いことがある。十年の久しきになつても征することが出来ぬ。

〔占考〕 正しきに付かないからして非常なる大敗をするの意味がある。



震下 乾上

无妄。元亨利貞。其匪正有眚。不利有攸往。

〔讀方〕 无妄は元に亨る。貞に利し。其れ正しきに匪ざれば眚あり。往く攸あるに利しからず。

〔大意〕 此の卦は動くに剛健の徳を以てする。何等妄りなることがない。そこで名けて无妄と云ふ。天の下に雷がある。雷は陽氣の發動する處で毫も妄りなることはない。无妄なる所以である。其の元亨利貞なるとは明かである。斯の如く活動するものであるからして正しくなかつたならば必ず眚がある。故に其れ正しきに匪ざれば眚ありと云ふ。若し其の心に於て邪なる所があるれば往く攸あるに利しからず。

〔占考〕 此の卦は妄りなることがないのである。故に極めて吉なるの意味がある。天の下を雷が行くやうなもので正々堂々たるものがある。けれども妄りに動いて眚にかゝると云ふ意味もある。天命のまゝに動くべきの意がある。眩暈がすると云ふ意味もある。

初九。无妄。往吉。

〔讀方〕 初九は無妄なり。往いて吉なり。

〔大意〕 此の爻は陽で陽の位に居り上に應ずるものがない。即ち一點の私心を挟まざるものであるから无妄の无妄たる所以である。此の志を以てやれば間違はない。そこで无妄なり。往いて吉なりと云ふ。

〔占考〕 誠の心があるからして吉なるの意味がある。

六二。不耕穫。不菑畲。則利有攸往。

〔讀方〕 六二は穫るに耕さず。畲に菑せず。則ち往く攸あるに利し。



〔天意〕 此の爻は中正の徳があつて九五に應じて居る。多少妄りなることがあるやうである。そこで之を戒めて云ふ。穫る爲に耕すやうなことをするな。畚ひんするために蓄するやうなことをするな。即ち穫ると云ふのは收穫をとるのであるが其の目的を以てやるな。考へなくやれと云ふのである。けれども計畫なくやれと云ふことではない。何か爲にすると云ふ考なくしてやれと云ふのである。畚は三年耕して既に收穫を得る土地を云つたものである。蓄は一年耕すことを云ふたのである。

〔占考〕 何等期待する所なくして活動すれば幸福ある意味がある。意外な幸福があるのである。

六三。无妄之災。或繫之牛。行人之得。邑人之災。

〔讀方〕 六三は無妄の災ひ。或は之が牛を繫ぐ。行人の得るは邑人の災なり。

〔大意〕 此の爻は上に應ずるものがあるから矢張り六二と同じく无妄の疑ひがある。災のあるとは思はれない。そこで无妄の災がある。或は之が牛を繫いで居ると云ふと其處を通る人に引張られて行つてしまふ。そこで村の人がそれが爲に災を被るやうなものである。即ち牛を繫ぐ所が悪いからである。六三は不中不正の爻であるから斯のやうなことになるのである。

〔占考〕 不慮の禍のある意味がある。其の處を戒しむべきの意味がある。

九四。可貞。无咎。

〔讀方〕 九四は貞にすべし。咎なし。

〔大意〕 此の爻は下に應ずるものがない。妄りなることがないのである。故に貞にすべし咎なしと戒しめてある。

〔占考〕 妄りに動かないのを宜しとする意味がある。動かなければ必ずしも悪いことはない。

九五。无妄之疾。勿藥。有喜。

〔讀方〕 九五は無妄の疾ひ。藥すること勿れ。喜びあり。



〔大意〕 此の爻は剛の主であつて下六二に應じて居る。矢張り妄りなることがあると云ふ疑ひがある。そこで无妄の疾ひと云つて居る。けれども元が應ずべくして應じて居るのであるから其の心に疚しい所はない。故に藥をやる必要はない。自ら喜びが出て來ると云ふのである。

上九。无妄。行有眚。无攸利。

〔讀方〕 上九は無妄あり。行けば眚あり。利する攸なし。

〔大意〕 此の爻は無妄の時に當つて下に應ずるものがあるから妄りなる疑ひがある。此の儘にして行けば眚あつて利する所はない。故に行けば眚あり。利する攸なしと云ふてある。

〔占考〕 何でも活動しない方が宜いのである。災を招く意がある。

良乾下

大畜。利貞。不家食。吉利。涉大川。

〔讀方〕 大畜は貞に利し。家食せずして吉なり。大川を渉るに利し。

〔大意〕 此の卦は天の上に山がある。山を止まるとなす。天は昇らんとし。山が之を止める。山は陽である。陽が止めるのであるから大畜と名けたのである。けれども此の卦は元乾の徳があつて而して止まつて居るのであるからして正しい意味がある。故に貞に利すと云ふ。斯の如く正しい人間であれば朝廷に仕へても差支ないから家食せずして吉なり。又大川を渉るに利すと云つて大なる仕事をしても差支ないといふのである。

〔占考〕 大畜は止まる意味がある。集まる意味がある。即ち蘊蓄する意味がある。進むこと能はずして躊躇して居る意味がある。けれども時機を見れば大川を渉るに利すと云ふから大に進んで差支ないと云ふ意味がある。従て小人であれば貯へがあつて奢る心がある。又乾の馬が留められて居るのであるから凡て動物の走らんとしたものは止められると云ふ意味がある。家の中に入

大畜



れられると云ふ意味がある。病氣にして見れば氣が鬱して更に出ないのである。けれども大に手術を施すか。さもなければ年月を経れば必ず快くなる。大畜であるから貯へる處大なる意味がある。志の大なる意味がある。

初九。有厲。利已。

〔讀方〕 初九は厲きことあり。已むに利し。

〔大意〕 此の爻は陽で陽の位に居り且つ乾の下にあるから進まんとするけれども、其の勢が微である。上六四に應じて居る。六四の爲めに制せられて居る。故に危い。斯の如きことはやめた方が宜いから已むに利しと云ふたのである。〔占考〕 人の爲めに制せられる意味がある。之を已めれば吉なるの意味がある。

九二。輿説輹。

〔讀方〕 九二は輿を説く。

〔大意〕 此の爻は剛中の徳がある。けれども六五の爲めに制せられて居る。九二のがから行くことをなさない。丁度輿が輹を説くやうな状態であつて其の所に安んじて居る。〔占考〕 行けば制せられるけれども自ら止まつて居れば制せられざる意味がある。

九三。良馬逐。利艱貞。曰閑輿衛。利有攸往。

〔讀方〕 良馬逐ふ。艱貞に利し。曰に輿衛を閑ふ。往く攸あるに利し。

〔大意〕 此の爻は過剛不中であつて妄りに進まんとすることを希望するものである。其の状態は恰も馬が逐かけて行くやうなものである。其の困難なることを知つて正しくせんければならない。そこで良馬逐ふ。艱貞に利しと云ふ。曰に輿衛を閑ふと云ふのは即ち自ら守る所以を閑ふのである。輿も衛も共に守ることを云ふたのである。斯の如く自ら守ることが出来るやうになれば何をしても差支ないから往く攸あるに利しと云ふ。九三は上に應交がないから人に制せられると云ふことがない。故に斯く云ふたのである。



〔占考〕 困難なことがあるけれども進むに宜い意味がある。處世道德の上から云へば妄りに己れの強いことを頼まないが宜い。

六四童牛之牯元吉。

〔讀方〕 六四は童牛の牯。元吉なり。

〔大意〕 此の爻は陰で陰の位にあり。初に應じて居る。初九は進まふとして居るけれども其の力微である。微なる處の初九を防ぐからして童牛の牯と云ふ。元吉なる所以である。即ち童牛に牯を嵌めてしまへば動くことが出来ぬのである。それが大きな牛になると云ふと牯を嵌めるのも困難になるのである。

此の卦は元來人の爲めに制せられると云ふたものである。初九にあつては六四の爲めに制せられると云ふ六四にあつては初九の來るのを微に防ぐを云ふ。矛盾した處があるけれ共そこが即ち易の處世訓道徳訓を主としたる所と云はなければならぬ。六四の爻も云は初九がやつて來れば煩いから之を微なるに防がうとする。假へそれが來なくても初九が來ると云ふことが分れば六四は之を微なる中に防ぐのである。

〔占考〕 物の微なるに當つて之を防ぐの意味がある。人を制すると易きの意がある。故に吉なるの意味がある。

六五豮豕之牙吉。

〔讀方〕 豮豕の牙。吉なり。

〔大意〕 此の爻は下九二に應じて居る。九二は剛中の質であるから妄りに上つて來ない。故に能く九二を制することが出来る。恰も豮豕即ち豕の兒に木を當てたやうなものである。牙と云ふのは即ち互の字であつて木を云ふたのである。木を互にして作つたものである。物の微なる時に當つて之を制するから吉なる所以である。

〔占考〕 六四と同じく微なる所を防いで吉を得るの意がある。

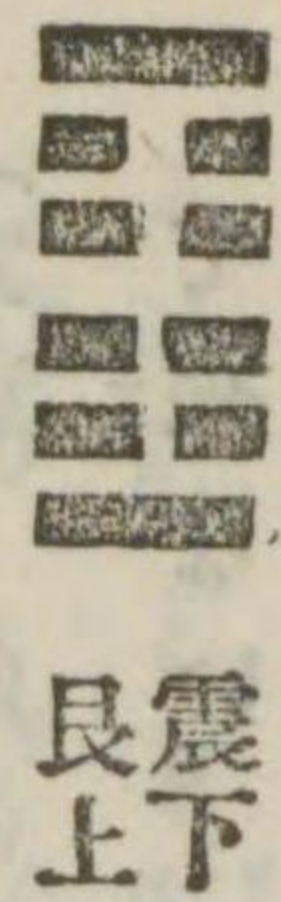
上九何天之衢亨。



〔讀方〕 上九は天の衢を何ふ。亨る。

〔大意〕 此の爻は大畜の時に當つて一陽を以て上に居る。最早畜の時代は去つてしまつたと云つても宜い。即ち大に通ずるの意である。天の衢を何ふ何の字は荷ふと讀むと云ふのは四通八達の所に當つて居ると云ふ意味で是から何れへも行くことが出来ること云ふ意味である。

〔占考〕 大に達するの意味がある。凡て來るの意味がある。



震下  
艮上

頤。貞吉。觀頤。自求口實。

〔讀方〕 頤は貞なれば吉なり。頤を觀て自ら口實を求む。

〔大意〕 此の卦は上下に二陽あつて中は陰ばかりである。其の形は頤に似て居る。故に名けて頤と云ふ。而して一般に養ふの道を説いてある。人間の口は身體を養ふの大元であるから養ふと云ふことは正しくなければならぬ。故に貞なれば吉なりと云ふ。養ふの道は自分自身を養ふにしても或は人を養ふ

にしても大に考へなければならぬ。故に頤を觀ると云ふ。自ら口實を求むと云ふのは口實は即ち口の中に入れるものゝことである。頤の道が宜いかどうかを見て後に自分の口に入れるものを求めるやうにしなければならぬと云ふのである。

〔占考〕 頤は養ふと云ふ意味である。二人が相對つて居る形がある。又其の形は離に似て居る。離を目となす。であるから目が非常に大きいと云ふ意味もある。又動くものを留めんとするのであるから寺とか山の上の仙人とか云ふやうな類である。又人を養ふ意味もあるけれども人に養はれる意味もある。養ふの道は甚だ苦勞する。又動いて止まるのであるから居所は終に安きことが出来る。又氣鬱してしまふ意味もある。又飲食を謹んで居るやうな意味もある。

初九。舍爾之靈龜。觀我朵頤。凶。

〔讀方〕 初九は爾の靈龜を捨て、我を觀て朵頤す。凶なり。



〔大意〕此の爻は頤の時に當つて陽で陽の位に居る。人を養ふものである。人を養ふには静かでなければならぬ。然るに初九は震の卦の主人公であるから常に動いてばかり居る。殊に上六四に應じて居る。之に頼らうとする。其の志は卑しい。そこで爾の靈龜を捨て、我を觀て朶頤す凶なりと云ふてある。爾と云ふのは初九を指す。我と云ふのは六四を指す。人の事を養ましがるかから其の結果は必ず好くないと云ふことである。靈龜は不思議な龜と云ふのであるから詰り寶物と云ふことである。朶頤は頤を垂れると云ふことである。口を開いて食ひたがり涎を垂れて居ることを云ふたのである。

〔占考〕此の爻は陽であるから人を養ふべき性質のものであるのに却つて六四に頼らんとする。即ち人の養ひを受けんとするの意味がある。慾の深い意味がある。卑められる意味がある。人を養ひの意味がある。

六一。頤頤。拂經于丘頤。征凶。

〔讀方〕六一は頤頤す。經に拂る。丘に於いて頤す。征は凶なり。

〔大意〕此の爻は上に應交がない。而も柔にして且つ中である。却つて下の初九に親しみ其の養ひを受けんとするから養ひの道を誤つたものである。そこで頤頤すと云ふ。頤頤は養ひの道を顛倒したものと云ふことである。又經に拂ると云ふのは常の道に悖つて居ると云ふことである。或は又進んで初九の養ひを受けんとするから丘に於て頤すと云ふ。丘は上九を云ふたものである。斯の如く間違つたことをすれば善い譯はない。そこで征けば凶なりと云ふて居る。

〔占考〕養ひの道を誤つて居るから己れより目下の者に養はれんとするの意味がある。何等の幸福をも得ざるの意味がある。

六三。拂頤貞凶。十年勿用。无攸利。

〔讀方〕六三は頤の貞に拂る。凶なり。十年用ふることなかれ。利する攸なし。〔大意〕此の爻は上九と應じながら上九は良で止まつて居るものであるから六三の不中不正なることを見て之を養ふことを欲しない。故に頤の貞に拂ると



云ふ。養ひの正しい道と違つて居る。凶なる所以である。十年の久しきに互ると雖も殆んど上九より助けらるゝとはない。止めた方が宜い。故に利する攸なしと云ふてある。

〔占考〕 利慾の爲めに動いて己れを助くべき人に信任せられざるの意味がある。

六四。顛頤。吉。虎視眈々。其欲逐々。无咎。

〔讀方〕 六四は顛頤す。吉なり。虎視眈々。其の欲逐々たり。咎なし。

〔大意〕 此の爻は陰で陰の位にあり。下初九に應じて居る。初九は欲に迷つて居るものであるから六四は其れに従つて養ひを求めやうとするやうなことはない。是れ亦養ひの道に悖つて居るから顛頤だ。けれども本來六四は正當であつて迷ふて居るものゝ養ひを受けない。故吉なりと云ふ。其の志は甚だ強<sup>ク</sup>いから其の欲逐々と云ふ。其の見る所甚だ低くない。寧ろ高いと云はなければならぬ。故に虎視眈々と云ふ。虎は高い所を見るからそこで斯う云ふたのである。咎なき所以である。

〔占考〕 己れの相當に養ひを受くべき人より養はれざるの意味がある。けれども却つて正しい意味がある。其の志大なる意味がある。

六五。拂經。居貞吉。不可涉大川。

〔讀方〕 六五は經に拂る。貞に居りて吉なり。大川を涉るべからず。

〔大意〕 此の爻は下に應ずるものがなくして上九五に親しんで其の養ひを受け居る。本天子の位であるから宜しく人を養ふべきものであるのに却て人に養はれると云ふことは善くないことである。故に經に拂るといふ。けれども唯正しくして居れば宜いと云ふのである。斯の如き状態であるからして大川を涉るべからずと云つて大になすことが出来ないと云ふのである。

〔占考〕 養ふべき人を養ふことが出来な意味がある。恥づべき意味がある。故に大仕事をなす可らざるの意がある。人に養はれるの意味がある。

上九。由頤。厲吉。利涉大川。



〔讀方〕 上九は由りて頤す。厲けれども吉なり。大川を渉るに利し。

〔大意〕 此の爻は陽で一番上にあるから多くの陰を養ふのである。多くの陰は上九に由りて養はれる。故に由りて頤すと云ふ。極めて厲いものであるから厲いと云ふ。けれども兎に角多くの人を養ふのであるから吉なり大川を渉るに利しと云ふ。

〔占考〕 衆人を養ふの意味がある。必ず成功するの意味がある。



大過棟橈利有攸往亨。

〔讀方〕 大過は棟橈む。往く攸あるに利し。亨る。

〔大意〕 此の卦は二陰四陽である。陽の方が多い。故に名けて大過と云ふ。即ち大なるものが過ぎると云ふ意味である。而も全體の卦の形が上下が弱くして内が強い。丁度木が重くて曲つて居るやうな感がある。故に棟橈むと云ふ

たのである。棟は橈むけれども力が強過ぎて橈むのである。故に卦一般の狀態は精力旺盛なるものと云はなければならぬ。往く攸あるに利しく又亨る所以である。

〔占考〕 此の卦は陽が強過ぎて陰は之に勝てない感がある。之を品物にして見れば外が悪くて内が良いのであるから珍寶が箱の中にあるやうなものである。又圍まれる意味がある。一見して極めて優しい様子をして居る人間である。又重い物を擔つて居る意味もある。氣ばかり強くて内容が之に伴はざる意味がある。事務が多過ぎる意味がある。或は費用が多過ぎる意味がある。物事中庸を得ない意味がある。獨立の意味がある。又顛覆するの虞れある意味がある。枯木に花咲くの意味がある。

初六藉用白茅无咎。

〔讀方〕 初六は藉くに白茅を用ふ。咎なし。

〔大意〕 此の爻は陰で四陽の後に接續して居つて而も巽の卦の主人公であるか



ら最も謹んで居る。其の謹む状態は藉くに白い茅を用ひて其の上に品物を置くやうなものである。直接地面の上には置かない。その位注意すれば随分腐いけれども咎はないことが出来る。云ふのである。

〔占考〕 謹むことが甚だしいからして咎なきことを得るの意味がある。上の者に壓せられるの意味がある。

九二。枯楊生稊。老夫得其女妻。无不利。

〔讀方〕 九二は枯楊稊を生ず。老夫其の女妻を得。利からざるなし。

〔大意〕 此の爻は陽で陰の位に居るから陽と陰との性質が先づ比較的調和したるものと云つても宜い。且つ下初六と親しんで居る。其の陰陽の調和の状態は恰も枯れた楊から稊を生ずるやうなものである。稊は新芽のことである。又他の方面から云へば老人が其妻を得たやうなものである。即ち生氣を含まして來る形である。利からざるなき所以である。

占考 其の心が感し人への助けを得るの意味がある。儼かに元氣付くの意味がある。

意味がある。

九三。棟桷凶。

〔讀方〕 九三は棟桷む。凶なり。

〔大意〕 此の爻は陽で陽の位に居り、過剛不中であつて、何等陰陽の調和のあると云ふことがないから凶である。

〔占考〕 占ひの上から云へば甚だ悪いものである。けれども處世上道德上から云へば其の強い所を直しさへすれば宜いのである。

九四。棟隆吉。有它吝。

〔讀方〕 九四は棟隆なり。吉なり。它の吝あり。

〔大意〕 此の爻は陽で陰の位に居り。又柔の道をも得て居るから陰陽が能く調和して居る。故に棟隆なり吉なりと云ふ。唯九三のやうな悪い人間と接近して居るから突然害を被むることがある。故に它の吝ありと云ふ。意外な災



があると言ふのである。  
[占考] 不意な災に罹ると云ふ意味がある。けれども大體に於ては極めて吉なるの意味がある。

九五。枯楊生華。老婦得其士夫。无咎。无譽。

[讀方] 九五は枯楊華を生ず。老婦其の士夫を得。咎なく。譽なし。

[大意] 此の爻は陽で陽の位に居り。陰陽の調和を得ざるものである。其の悪いことは勿論であるが唯上六と親しんで居る。故に此の方面から陰陽の調和を得ることが出来る。其の狀態は恰も枯れた楊から華が生じ老いたる女が其の夫を得たるやうな感がある。であるから必ずしも譽めたことでもないけれども又必ずしも悪いと云ふことはない。故に咎なく譽なしと云つて居る。  
[占考] 此の爻は必ずしも大に成功ではないと云ふ意味がある。けれども處世上道徳上の訓へから云へば年老いて結婚すると云ふのは若い者の眞似をするのであつて賞めた話ではない。けれども必ずしも悪いとも言ひ難いのである。

上六。過涉。滅頂。凶。无咎。

[讀方] 上六は過ぎて渉る。頂を滅す。凶なり。咎なし。

[大意] 此の爻は陰で陰の位に居り而も四陽の爲めに壓せられて居る。弱きに過ぐ。如何ともすることは出来ない。故に過ぎて渉り頂を滅すといふ。過ぎて渉るは渉るに過ぎたりといふこと即ち渉りそこねたことである。悪いけれども其の志に於ては即ち誇るべき所があるから咎なしとするのである。  
[占考] 此の爻は禍中に陥つてしまつた。下より壓せらるゝの意味がある。



坎下  
坎上

習坎有孚。維心亨。行有尙。

[讀方] 習坎は孚あり。維れ心亨る。行けば尙ふことあり。

[大意] 此の卦は上も坎下も坎。故に名けて習坎と云ふ。習は重なりと云ふ意味である。唯誠意誠心を懐いて其の分に安んずるより外はない。斯の如くす



れば則ち自然に誠の心が感通することがある。而して遂に其の困難を脱出することが出来る。故に曰く維れ心亨る。行けば尙ぶとありと。尙ぶと云ふのは善いことがあると云ふ意味である。

〔占考〕此の卦は上も下も坎である。坎を勞するとなす。故に苦勞心配があると云ふ意味がある。けれども其の心に於ては極めて孚があるから其の點を頼りとして感じ通することが出来る。一陽が二陰の間に陥りて居る。而も水と云ふ形であるから溺れると云ふ意味もある。従て又臥すと云ふ意味もある。一陽の兩側に二陰があるのであるから男が女を求めると云ふ心が甚だ強い。外が軟かくて内が硬いものである。又坎は流ると云ふ意味もあるから住居の定らない意味もある。坎は色情の卦であるから多く淫行のある意味がある。故に古來坎の卦が上卦にあるものは昔し淫行のあつた形であるとする。下卦にある者は現在淫行のある形として居る。盜賊の意味がある。二人が相應じて居らない。即ち九二と九五が應じて居らないから友人相反の意味がある。

初六。習坎入于坎窞。凶。

〔讀方〕初六は習坎。坎窞に入る。凶なり。

〔大意〕此の爻は陰で陰の位にあり。極めて微なるものである。如何ともすること出来ぬ。恰も穴に入つてしまふやうな状態であるから習坎坎窞に入る凶なりと云ふてある。此の窞は穴の中の更に其の横の穴である。

〔占考〕身分の低い中に非常なる困難がある意味がある。一難あつた後更に他の一難がある意味がある。處世上道徳上の訓戒とすれば唯單に之に堪へることを必要とするのである。

九二。坎有險。求小得。

〔讀方〕九二は坎に險あり。求むること小く得。

〔大意〕此の爻は陽で下の卦の中にあり。上に應交がない。如何ともすることは出来ない状態であるから坎に險ありと云ひ求むること小く得と云つて大に



得ることは出来ないものである。

〔占考〕 艱難の中に於て更に又他の艱難に遭ふ意味がある。目前の利益はあつても大體に於ては如何ともすることが出来ない意味がある。

### 六三。來之坎々。險且枕。入坎窞。勿用。

〔讀方〕 六三は來之坎々。險且枕す。坎窞に入る。用ふること勿れ。

〔大意〕 此の爻は陰で陽の位に居るから却々剛情なものである。けれども下の坎の終りで更に又上の艱難に接して居るものであるから其の困難なることは思ひやられる。故に曰く。來之坎々。險且枕すと。此の枕すと云ふのは枕をして臥して居る意味である。如何ともすることは出来ず。そこに寐て居るのである。唯寐て居れば宜いけれどもそれで満足することが出来ぬで活動し始めるから益々困難に陥る。其の様なことをしてはならないから坎窞に入る。用ふること勿れと云ふてある。

〔占考〕 一難去れば更に又一難來るの意味がある。活動せざるを吉とするの意味がある。味がある。活動すれば更に困難に陥るの意味がある。

### 六四。樽酒簋。貳用缶。納約自牖。終无咎。

〔讀方〕 六四は樽酒簋。貳は缶を用ふ。約を納るゝこと牖よりす。終に咎なし。

〔大意〕 此の爻は坎の時に當つて陰で陰の位にあるから最も靜かなるものである。其の誠意誠心は天にまで届くものである。之を形容して樽酒簋。貳は缶を用ふ。約を納るゝこと牖よりす。終に咎なしと云ふ。樽酒簋と云ふのは一樽の酒と祭りの道具である。簋と云ふものがあるのみだと云ふのである。貳と云ふのは之に副ふるにと云ふ意味である。即ち其の祭りの道具に副へるに缶を以てするを云ふ。缶はかはらけの類である。何れも質朴の事を云ふたのである。之も一の形容であるけれども他の形容を以てすれば人と約束するに牖からするやうなものである。普通牖からすべきものではないけれども簡單にすれば牖からしても宜い。誠意誠心が中に満ちて居るから恂なことをやつても人が之を悪く云ふものはないと云ふのである。



〔占考〕 大に人に信用せられるの意味がある。極めて粗末なる品物であるが、  
も誠意誠心の籠つて居る意味がある。

九五。坎不盈。祗既平。无咎。

〔讀方〕 九五は坎盈たず。祗既に平らかなり。咎なし。

〔大意〕 此の爻は陽で陽の位に居り、且つ天子の位に居るから能く坎を救ふもの  
である。けれどもまだ其の時勢にならないからして大きいことを求めること  
は出来ない。そこで坎盈たず、祗既に平かなれば咎なしと云ふてある。即ち既  
に平かなると云ふのは水が一杯にならないと云ふことである。一杯にならな  
いと云ふのは時勢が来ないと云ふ意味である。

〔占考〕 險難を脱せんとするけれども未だ其の時を得ざるの意味がある。

上六。係用徽纆。寘于叢棘。三歲不得。凶。

〔讀方〕 上六は係するに徽纆を用てす。叢棘に寘く。三歲得ず。凶なり。

〔大意〕 此の爻は陰で坎の極にあるから最も甚しい困難にかゝるものと云はな  
ければならぬ。故に係するに徽纆を用てすと云ふ。係すると云ふは即ち繋ぐ  
と云ふことである。徽纆は微も纆も共に細と云ふ意味である。繩で以て繋ぐ  
れると云ふことである。叢棘は棘で圍んで居る所であつて昔罪人を置いた處  
である。さう云ふ處に置かれると云ふことである。三年の久しきに亘つても  
出ることが出来ないからして凶である。

〔占考〕 此の爻は何等其の徳の賞すべきものもなく到底困難を免れることが出  
来ないのみならず、遂に獄に下つてしまつて如何ともすることは出来ない。處  
世、上道徳上の訓戒として見れば、小人にして困難の極に居るから如何ともすべ  
からざるの意味がある。



離上下

離。利貞。亨。畜牝牛。吉。

〔讀方〕 離は貞に利し。亨る。牝牛を畜ふ。吉なり。



〔大意〕此の卦は下も上も離であるからして名けて離と云ふ。又或は重離とも云ふて居る。丁度乾爲天の卦を重乾と云ふやうなものである。けれども其の他の卦に付て重坤とか重兌とか重巽と云ふやうなことは云はない。此の卦は下の三爻が其の位地に當つて居る。即ち陽で陽の位にあり。陰で陰の位にある。又陽で陽の位に居る。其の中に付て六二は陰で陰の位にある。殊に中央に居る最も好い性質を備へて居るものとせなければならぬ。故に之を以て一卦の主人公とすることが出来る。元來離の卦は火である。火の性質は燃え上る。之を人にして見れば何でも自分のが宜いとして人の説を聞かない弊がある。故に貞に利しと云ふ。さうすれば大に亨ることが出来るのである。又人の云ふことを肯かないで自分ばかり宜しとしてやると云ふと終に禍にかゝることもあるから、そこで從順と云ふ徳を養はなければならぬ。牝牛を畜ふ吉なりとある。牝牛は雌牛である。雌牛は優しいものである。優しい徳を養へば吉なりと云ふのである。

〔古考〕此の卦は火の意味である。麗くと云ふ意味である。物に附着するの意

味である。だから何でも物がくつ付くと云ふ意味がある。鳥が網にかゝるとか。魚が網に入るとか。品物が吊してあるとか云ふやうな意味である。又外が硬くて内が虚しいものであるから龜の甲鱗などは皆此の中に入る。又火は燃え上つて活動ばかりして居るから遂に勞するの意味がある。火は盛んであるから衰へてしまふこともある。故に何でも速かにすることを宜いとす。又餘り明かなものであるからして遠くが見えると云ふ意味がある。智慮明晰の意味がある。昇る意味がある。又物事にすれば延びる傾きがある。何となれば上も日下も日で日が重なるからである。身を亡ぼす意味もある。性急の意味がある。美麗な意味もある。夏の意味もある。又熱病の意味がある。

初九。履錯然。敬之。无咎。

〔讀方〕初九は履錯然たり。之を敬すれば咎なし。

〔大意〕此の爻は離の時に當つて陽で陽の位に居り、極めて明かであつて且つ上に進まんとするものである。故に之を形容して云ふのに履は錯然たりと。錯



然と云ふのは亂れる意味である。唯斯う云ふ場合には戒めなければならぬから之を敬すれば咎なしと云ふたのである。

〔占考〕 餘り活動に過ぎて身を過るの意味がある。若し其の點を注意すれば盲なるの意味がある。

六一。黃離。元吉。

〔讀方〕 六二は黃離。元吉。

〔大意〕 此の爻は陰で陰の位に居り且つ其の中を得て居るからして其の行ふ所一として可ならざるものはない。故に黃離元吉と云ふ。黃は中の色である。離は附着すると云ふ意味である。即ち黃色に附着して居るので中の徳を得て居ると云ふのである。元吉なる所以である。

〔占考〕 凡てのことが皆中庸を得て居るから吉なるの意味がある。大に明かなるの意味がある。

九三。日昃之離。不鼓缶而歌。則大耋之嗟。凶。

〔讀方〕 九三は日昃の離なり。缶を鼓して歌はざれば則ち大耋を之れ嗟す。凶なり。

〔大意〕 此の爻は陽で陽の位に居るから極めて強いものである。けれども一の離が終つて更に他の離が起つて居るから火か更に燃んとするやうなものである。九三は餘りに強過ぎるから其の天命に安んずることを知らないで大に後悔することがある。故に日昃の離なり。缶を鼓して歌はざれば則ち大耋を之れ嗟すと云つて居る。日昃は離の時であるけれども既に日が傾いて居る。及は傾くと云ふ意味である。斯の如き場合に當つては缶を鼓して歌つて楽しんで其の天命に安んぜよ。さうしないと云ふと大耋を嗟すで年を取つてしまつて嘆息することを免れない。

〔占考〕 物事の遷延する意味がある。焦る意味がある。樂く其の分に安んじて今日を樂めば則ち吉なることが出来る。

九四。突如其來如。焚如。死如。棄如。



〔讀方〕九四は突如として其れ來如す。焚如す。死如す。棄如す。

〔大意〕此の爻は下卦が終つて上卦が始まつたのである。日が没して又出たやうなものである。火が滅して更に又燃上つたやうなものである。故に曰く。

突如としてそれ來如す。焚如すと。斯の如き状態であれば死ぬより外仕方がないから死如すと云ふ。又棄てられるより外ないから棄如すと云ふたのである。

〔占考〕火が一度納まつたかと思へば又突然燃上つた。其の爲め非常な困難に陥る意味がある。

### 六五。出涕。沱若。戚嗟若。吉。

〔讀方〕六五は涕を出すと沱若たり。戚嗟若す。吉なり。

〔大意〕此の爻は陰で陽の位に居り。君の位に當つて居る。然れども陽が強くして之を制することが出来ない。唯自ら悲んで居るのみであるから涕を出すと沱若たり。戚嗟若すと云ふて居る。斯の如き時に當つては如何なる人と

雖も如何とも仕様がなない。故に吉なりと云ふのである。

〔占考〕手の出しやうがない時に當つては唯衷心悲んで居るのみで別に何等の仕事をもしないから其の禍を免れることが出来る。素より大に成すことは出来なけれども、亦吉なることを得る意味がある。

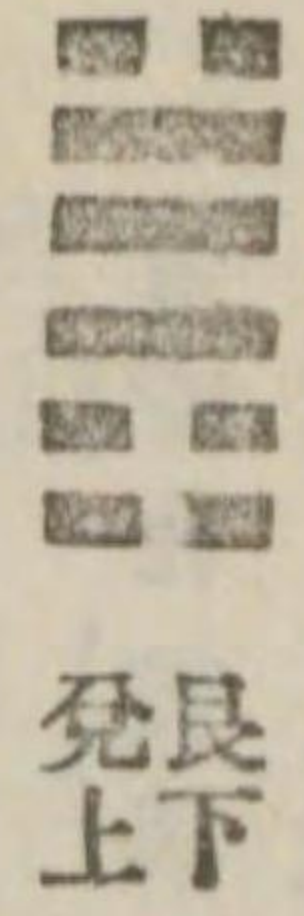
### 上九。王用出征。有嘉。折首。獲匪其醜。无咎。

〔讀方〕上九は王用て出征す。嘉みすることあり。首を折く。獲ると其の醜に匪す。答なし。

〔大意〕此の爻は陽を以て上に居る。且つ明の極である。火の燃え方が既に衰へて居るのであるから最も火の要領を得たるものと云つても宜い。此の心を以てすれば則ち六五に親近されるとは素よりである。故に六五の君が出征する時に賞與を蒙る。又首を取るやうなこともあるけれども敵の醜なるもの即ち小なる者を取るやうなことはしない。斯の如く聰明の才智を以て行ふものであるから答なきことが出来るのである。



〔占考〕 人に用ひられる意味がある。又大きい物は得るけれども小さい物は失くす意味がある。大に勝利を得るの意味がある。



咸亨利貞取女吉

〔讀方〕 咸は亨る。貞に利し。女を取りて吉なり。

注意。此の卦からして下を下經とする。離の卦までを上經とする。上經が三十卦下經が三十四卦である。上下二卦に分つたと云ふことに付ては種々の説がある。易の繫辭傳に二篇の作。萬有一千五百二十と云ふことがあるから繫辭傳の出來た頃には既に上下二經があつたに違ひない。又上經三十卦に付て之を見ると云ふと乾坤が一番始めにある。坎離が一番終りにある。乾坤は天地であつて一番始め坎離は宇宙間の最大現象である。それであるから上經三十卦の列べ方に付ては苦心して居ることが分る。デット考へなければ斯う云ふやうに列べられるものではない。而して下經の一番初めに咸の卦がある。咸

は澤山咸である。澤を少女となす。山を少男となす。少男少女が逢つて居るのである。男女の道があれば子供が生れる。丁度乾坤があつて萬物が生ずるが如く男女あつて子供が生ずるのである。故に咸の卦を初めに置いたと云ふことは意味のないこととも言ひ難い。

〔天意〕 此の卦は少男少女の卦である。男女の關係するものは少男少女に如くはない。殊に下卦は止つて居る。上卦は喜むで居る。止まつて喜んで居るから其の誠意誠心は必ず感ずるに違ひない。此の卦を名けて咸と云ふ。斯の如く誠意誠心がありさへすれば物の通らぬと云ふことはない。唯一番心配するのは正しいことをしなければならぬことである。故に貞に利して云ふ。女を取つて吉なりと云ふのは斯の如き精神を以て相互に感通して居るのであるから女を取つても差支ないのである。女を娶つて差支ないと云ふのは何であるかと云ふと相互に感じて居る中にあつては例へば他の人を雇つても宜しいし又家來を頼んでも宜しい。何でも人を頼み入ると云ふとに付て吉なるのである。〔占考〕 此の卦は少男が少女に交はらんとして居るのであるから感通の意味が



ある。誠意誠心を以て人に感通するのであるから必ず助けを得るの意味がある。萬事吉なるの意味がある。人を娶つて、吉である。人を雇つても吉である。思ふこと必ず通る意味がある。従て又待つと云ふ意味もれば來ると云ふ意味もある。けれども感ずると云ふ極は唯其の所に居るだけであつて活動がない。病氣でもあると云ふと大病になる。妊娠する意味がある。止まつて喜んで居る意味がある。親しむ意味がある。又感ずるのだから早い意味がある。

初六咸其拇。

〔讀方〕 初六は其の拇に感ず。

〔大意〕 此の爻は陰で陰の位に居つて上九四に應じて居る。けれども微なるものであるからして大に九四を感動せしめることは出來ない。そこで僅かに拇指を感動せしめる位のものであるから其の拇に感ずと云ふのである。

六二咸其腓。凶。居吉。

〔讀方〕 六二は其の腓に感ず。凶なり。居れば吉なり。

〔大意〕 此の爻は陰で陰の位に居る。從順中正である。上九五に應じて居る。又は九五を頼らんとするものであるけれども未だ大に之に頼ることも出來ない。殊に私を以て頼らんとする意味がある。何となれば下の中なるものが上の中なるものに應ずるからである。そこで斯う云ふことは廢めた方が宜いのである。故に居れば吉なりと云ふ。腓と云ふのは膨ら脛である。其の拇に感ずるよりは感ずる所が少くして低い。けれども其の感じ方が善くないから凶なる所以である。

〔占考〕 人に交るに私を以てするから凶なる意味がある。其の身分に安んずるを以て吉とする意味がある。

九三咸其股。執其隨。往吝。



〔讀方〕 九三は其の股に咸す。其の隨ふを執りて往けば吝なり。

〔大意〕 此の爻は過剛不中であつて上六に應じて居る。上六は陰であつて而も兌の主人であるから喜びを以て九三を迎へて居る。九三も亦之を喜んで上六の命令の儘にするから殆んど其の操が立たない。そこで其の感ずる所は深いけれどもやり方が善くないのであるから其の儘にして行つたら必ず吝なること云ふのである。股に感ずると云ふのはやり方が深いことを云ふたのである。其の隨ふを執ると云ふのは上六に隨ふて居ることを云ふたのである。

九四。貞吉。悔亡。憧々往來。朋從爾思。

〔讀方〕 九四は貞にして吉なり。悔い亡ぶ。憧々として往來すれば朋爾の思ひに従ふ。

〔大意〕 此の爻は陽で陰の位に居る。而も初六に應じて居る。正しくなければならぬからして貞なれば吉なりと云ふ。けれども男女相ひ感通するは其の

位が正しくなければならぬ。陽で陰の位に居るのは正しくない。悔あるべきであるけれども優しいものであるから悔亡ぶと出来る。唯憧々として往來し憂ふる所があれば初六の朋が九四の思ふ所に従ふやうになつて来る。

〔占考〕 私の心が萌す意味がある。

九五。咸其脢。无悔。

〔讀方〕 九五は其の脢に咸す。悔なし。

〔大意〕 此の爻は咸の時に當つて剛にして且つ中正である。天下を感ずるに足るものである。脢は脊中の肉で動かないものである。其の脢に咸すると云ふのは動かすして人を感ずることを云ふたのである。唯六二に應じて居ると云ふことは廣く天下を感動すべき所以でない。悔あるべきである。けれども其の事は小事件であつて九五の徳を以てすれば全體を感動することが出来るから其の脢に咸す。悔なしと云ふのである。

〔占考〕 大に人を感動する意味がある。多少疑ひを蒙るの意味がある。



上六。威其輔頰舌。

〔讀方〕 上六は其の輔頰舌に威す。

〔大意〕 此の交は陰で陰の位に居り。兇の主人公であるから口の人である。口を以て人を感動せんとするものである。故に其の輔頰舌に威すと云ふ。

〔占考〕 口を以て人を悦ばせやうとするのであるから人が服せざるの意味がある。



巽上 震上

恒。亨。无咎。利貞。利有攸往。

〔讀方〕 恒は亨る。咎なし。貞に利し。往く攸あるに利し。

〔大意〕 恒は常あり且つ久しいと云ふ意味である。又渝らないと云ふ意味である。此の卦は下に巽の長女があり。上に震の長男がある。長男と少女であるから之を夫婦に譬へて見れば其の志が容易に變らないものと云はなければならぬ。

らない。少男少女であれば男子の氣も強く女の氣も強いから變り易いものであるけれども長男長女は年取つて居るから容易に變らないものである。斯の如く變らない心がありさへすれば物は通らないと云ふことはない。そこで亨ると云ひ。又咎なし貞に利し往く攸あるに利しと云ふたのである。

〔占考〕 此の卦は常に久しいと云ふ意味である。長壽の意味がある。又之を病氣にして見れば長い意味がある。物事は通るけれども久しきを要するの意味がある。又雷に風であるから共に實質のないものである。物が消滅すると全然其の痕跡を失つてしまふ意味がある。けれども巽も木であり震も木であるからして繁殖すると云ふ意味もある。物事は凡て延引する意味がある。又互に背くと云ふ意味がある。何となれば震と巽とは正反對のものであるからである。

初六。浚恒。貞凶。无攸利。

〔讀方〕 初六は浚恒なり。貞なれば凶なり。利する攸なし。



〔大意〕 此の爻の陰で陽の位に居るから婦徳の正しからざるものである。而も上九四に應じて居る。是は親しむにしても其の道を得ざるものである。故に浚恆と云ふ。浚は深いと云ふ意味である。恆に久しく交はる道を深くせんとするのである。其の道を得ずして交をせんとするのは宜しくない。其の儘にして行かうとするから貞なれば凶なり利する攸なしと云ふたのである。

〔占考〕 己れは親しんで居るけれども先方ではそれほどに思はないこともある。之を占ひの上より云へば凡て凶である。

九二。悔亡。

〔讀方〕 九二は悔い亡ぶ。

〔大意〕 此の爻は陽で陰の位に居るから是では逆も久しかるべきものでない。悔あるべきであるけれども兎に角中の所に居るから悔い亡ぶことが出来る。

〔占考〕 志が成らうとして成らざる意味がある。人が親しまんとしても妨げる意味がある。けれども遂に其の志を遂げる意味がある。

九三。不恒其德或承之辱貞凶。

〔讀方〕 九三は其の徳を恒にせず。或は之が辱を承く。貞なれば凶なり。

〔大意〕 此の爻は過剛不中であつて上六四に應じて居る。斯の如き精神で交はらうとするのは大なる心得違ひである。故に其の徳を恒にせざれば或は辱を承くと云つて居る。辱を蒙むることを云ふたのである。此の心を改めなければ凶なるは知れたことである。故に曰く。貞なれば凶なり。

〔占考〕 餘り亂暴であつて却つて人の爲に侮られる意味がある。

九四。田无禽。

〔讀方〕 九四は田に禽なし。

〔大意〕 此の爻は陽で陰の位に居り。且つ動くものである。下の初六に應じて居るけれども初六の方が隠れて見えない。之と會ふことが出来ない。丁度田して禽がないやうなものである。田すると云ふのは狩獵することである。初



六は九四に求めやうとして居ると云ひながら九四の方では初六が隠れて居ると云ふのは矛盾であるが是は易の面白味のある所である。一の爻に付ては其の爻の意を取るものであるから今初六に付ては九四の方へ行かうとする意味を取つて九四の方では初六を見付けても九四が思ふが如くに來ないとする。此邊が意味の深い所である。

〔占考〕 此方ではかり慕つても先方で却つてそれほどに思はない意味がある。勞して効のない意味がある。

六五。恆其德。貞。婦人吉。夫子凶。

〔讀方〕 六五は其の德を恆にす。貞なり。婦人は吉。夫子は凶なり。

〔大意〕 此の爻は陰で上卦の中に居るから先づ其の德を常にして正しいものと云はなければならぬ。婦人とすれば此の様でなければならぬけれども男子では常に其の德を正しくして居つても何の役にも立たない。それで夫子なれば凶と云ふのである。

〔占考〕 何等の仕事をもなさざるの意味がある。唯消極的なるの意味がある。處世。上道。徳上の訓から云へば男の道ではない。女の道である。

上六。振恒。凶。

〔讀方〕 上六は振恒す。凶なり。

〔大意〕 此の爻は陰で陰の位に居り。且つ動く性なる震の卦の終りにあるから非常に劇しく活動するものである。九三に應じて居るけれども九三と親しまないで却つて辱めるやうなことがある。恒の道に適はない。故に振恒と云ふ。振動を以て恒となすと云ふ意味である。餘り活動ばかりして居るのである。〔占考〕 其の德を守ることが出來ない。何等目的なくして活動するの意味がある。己れに随つて來る者をも入れることが出來ない意味がある。



遯。亨。小利。貞。



〔讀方〕 遯は亨る。小く貞に利し。

〔大意〕 此の卦は下から二陰が長じて來たから上四陽が遯れんとして居る。故に遯と云ふ。遯は君子の退く時である。君子は其の退くべき時に於て退く。亨る所以である。事を成すべきの時でないから小く貞に利しと云ふたのである。

〔占考〕 總て遯るべき時であるから安からざる意味がある。心が定まらざる意味がある。陽氣が退くのであるから病が重い意味がある。禍に罹らんとするけれども、其の機を見ることの出来るものは之を免れる意味がある。世間を避ける意味がある。仙人、佛者等の意味がある。花にして見れば極めて神聖なる菊の花の如きものである。或は又世の中に用ひられない秘藏の物體の如きものである。遠方の地の如きものである。世間とは異なつた人の如きものである。出帆する意味がある。衰へる意味がある。富の減ずる意味がある。上が熱して下の冷える意味がある。

初六。遯尾厲。勿用有攸往。

〔讀方〕 初六は遯尾す。厲し。往く攸あるに用ふる勿れ。

〔大意〕 此の爻は遯の時に當つて一番終ひの方にある。遯れる者に追いて行くの感がある。故に厲い。斯の如きものは活動してはならないから遯尾す厲し往く攸あるに用ふるなかれと云ふたのである。

〔占考〕 動かざるを可とするの意味がある。

六二。執之用黄牛之革。莫之勝説。

〔讀方〕 六二は之を執ふるに黄牛の革を用てす。之に勝つて説くことなし。

〔大意〕 此の爻は陰で陰の位にあり。直ちに四陽の後に接して居る。之に加ふるに柔順中正であるから逃げんとするものを抑へることが出来る。而も中正の徳を以てするから之を執ふるに黄牛の革を用てす、之に勝つて説くことなしと云ふ。六二に捉はれれば解くことが出来ないと云ふのである。



〔占考〕柔を以て剛を制するの意味がある。頽勢を挽回する意味がある。

九三。繫遯。有疾。厲。畜臣妾吉。

〔讀方〕九三は繫遯す。疾有り。厲し。臣妾を蓄へて吉なり。

〔大意〕九三は遯の時に當つて過剛不中である。上の三陽と共に遁れ去らんとする。所が六二の爲めに追ひ蒐けられる。そこで繫遯すと云ふ。心に疾む所あつて甚だ厲い。追ひ蒐けられて居りながら據なく止まるのであるから正しい道ではない。臣妾を蓄へるやうなものである。其の位のことをするには吉なりと云ふのである。

〔占考〕遁れんとしても捕へらるゝの意味がある。小なる人は養つても宜いと云ふ意味がある。心に煩悶がある。

九四。好遯。君子吉。小人否。

〔讀方〕九四は好遯す。君子は吉。小人は否なり。

〔大意〕此の爻は陽で陰の位に居る。遯るべき時に遯るゝものである。故に曰く。好遯すと。君子は此の如くにして吉なれども小人は然ること能はずして凶なり。

〔占考〕事情に捉はれないで己だけで決すれば吉なる意味がある。君子の風がある。

九五。嘉遯。貞吉。

〔讀方〕九五は嘉遯す。貞にして吉なり。

〔大意〕此の爻は遯の時に當つて陽で陽の位に居るから最も其の宜しきを得たものである。遯るべくして遯れるものである。そこで嘉遯すといふ。貞にして吉なる所以である。

〔占考〕退くべき時に退くの意味がある。

上九。肥遯。无不利。



〔讀方〕 上九は肥遯す。利からざるなし。

〔大意〕 此の爻は遯の時に當つて下に應ずるものがない。物外に超然たるものである。心に疾む處がない。故に肥遯す利からざるなしと云ふて居る。肥の字は即ち病がないと云ふ意味である。病がなければ肥滿するからである。



乾上 震上

大壯。利貞。

〔讀方〕 大壯は貞に利し。

〔大意〕 此の卦は下から四陽が上つて上の二陰が減せんとして居る。名けて大壯と云ふ。大に壯なるの意味である。又一面から見れば天の上に雷が鳴つて居る。大壯と云ふべきである。壯なるものは必ず衰へるから亨ると云はないで唯貞に利しと云ふ。  
〔占考〕 此の卦は陽氣の最も盛んなる意味がある。天の上で雷が鳴つて居るやうな意味であるから餘り活潑に過ぎる。心が安くなく勞する事が多い。活潑にして天の上まで出るのであるから立身出世の意味がある。天のやうな心を以て動くのであるからして大に人に施す意味がある。故に小人が此卦を得れば却つて悪い。大に繁昌する意味もある。驕る意味もある。強暴の意味がある。餘り進み過ぎて事を誤る意味がある。

初九。壯于趾。征凶。有孚。

〔讀方〕 初九は趾に壯なり。征けば凶。孚あり。

〔大意〕 此の爻は大壯の時に當つて陽で陽の位にあるから進むに盛んなるものである。唯位が微にして行かうとするものであるから其の凶なることは知れて居る。故に曰く。征けば凶と。けれども其の位に當つて居るから心に誠がないと云ふことはない。故に孚ありと云ふ。趾に壯なりと云ふことは趾は即ち足の指である。足の指が壯んであると云ふのは即ち動かんとすることを云ふたのである。



〔占考〕 進んでは宜くないと云ふ意味がある。

九二。貞吉。

〔讀方〕 九二は貞にして吉なり。

〔大意〕 此の爻は陽で陰の位にあるから柔を以て行ふものである。何でも下が非常に壯んであるから餘り壯んに過ぎてはならないといふ處から斯様な性質のものは最も吉なるものとして居る。故に貞にして吉といふ。

〔占考〕 占ひの上より言へば極めて宜いのである。けれども處世上道徳上の訓へしとては餘り強過ぎることをしてはならない。

九三。小人用壯。君子用罔。貞厲。羝羊觸藩。羸其角。

〔讀方〕 九三は小人は壯を用ふ。君子は罔を用ふ。貞なれども厲し。羝羊藩に觸る。其の角を羸す。

〔大意〕 此の爻は陽で陽の位に居つて最も亂暴なものである。小人であれば亂暴するけれども君子であるに大に注意する。壯を用ふると云ふのは壯んにすると云ふことである。罔を用ふると云ふのは无を用ひると云ふので即ち壯でないものを用ひるのである。若し壯を用ひるやうなものがあつたならば其の事は正しいからと云つても危い。其の狀態は恰も羊が躍るのを喜んで藩に觸れて其の角を羸するやうなものである。

〔占考〕 自ら禍を招く意味がある。小人の心を持つてはならない。必ず君子の心を以てすべきである。

九四。貞吉。悔亡。藩決不羸。壯于大輿。輶。

〔讀方〕 九四は貞にして吉。悔い亡ぶ。藩決して羸せず。大輿の輶に壯んなり。〔大意〕 此の爻は陽で陰の位に居る。中庸を得たるものであるから貞にして吉。悔い亡ぶることが出来る。九三が藩に觸れて其の角を羸するやうなことはない。却つて藩は破れて居つて何等の禍を及ぼすこともない。故に藩決して羸せずと云ふ。大輿の輶に壯んなりと云ふのは進んでも宜いと云ふことである。



輓は車の輪しばりのことである。

〔占考〕 何等禍のない意味がある。あつても向ふより取れる意味がある。

六五。喪羊于易。无悔。

〔讀方〕 六五は羊を易に喪ふ。悔なし。

〔大意〕 此の爻は陽で陰の位に居るけれども、下の四陽の爲に壓迫せられる。柔順でありながら壓迫せられる状態は丁度羊が逃げたと同じことである。故に羊を易に喪ふと言ふてある。易は即ち場の字である。極めて柔順であつて下四陽の爲に道を開いてやる。羊が逃げたと同じことであるから悔ないことが出来る。

〔占考〕 多數の者が己れに迫り来るの意味がある。柔を以て之に接して宜いと云ふ意味がある。

上六。羝羊觸藩。不能退。不能遂。无攸利。艱則吉。

〔讀方〕 上六は羝羊藩に觸る。退くこと能はず。遂ぐることも能はず。利する所なし。艱なれば則ち吉なり。

〔大意〕 此の爻は陰で陰の位にあり。震の極であるから羊が躍つて藩に觸れたやうなものである。けれども最早進まふとしても進むことは出来ない。追はんとしても追ふことも出来ない。故に利する攸なしと云ふ。若し艱難を知つて其の積りで居れば吉であるから艱なれば則ち吉なりと云ふ。

〔占考〕 進退維れ谷まる意味がある。其の處に忍耐すべきの意味がある。然すれば救ふべきの意味がある。



坤上

晋。康侯用錫馬蕃庶。晝日三接。

〔讀方〕 晋は康侯用て馬を錫ふこと蕃庶たり。晝日三接す。

〔大意〕 地上に火が出るの象なり。故に晋といふ。進む意である。日の地上を照す象。天下の諸侯を會するの意がある。康侯とは萬民を安んずるの諸侯で



ある。天下の大に治まる時であるから諸侯の中にて優秀なる者は天子より馬を賜はると蕃庶として夥しいものがあるのみならず。一日に三度も天子に謁見することがある。

〔占考〕 此卦は上に離があり。下に坤がある。地上に日あるの象。晝明かなるの意味がある。萬物光耀せるの意味であるから外明かで内乏きの意がある。離を麗くとするから聰明の人に從へば吉なるの意がある。人の師となるの意がある。

初六。晉如。摧如。貞吉。罔孚。裕无咎。

〔讀方〕 初六は晉如摧如。貞なれば吉なり。孚とすることなし。裕なれば咎なし。

〔大意〕 此爻は陰で陽の位に居るから進まんとするものであるが位微にして出來ない。無理に進まないが宜い。故に晉如摧如(くだかれる意)といふ。又貞なれば吉といふ。若し急に人の信用を得んとするが如きとあれば宜くない。位

が微なるものであるから中々左様に行かない。ユックリとせよ。然すれば宜いといふので孚とすることなし裕なれば咎なしといふ。孚とすることなしとは人が信用せないことである。

〔占考〕 進まんとして進み能はざるの意味がある。位微であるから未だ人に信せられざるの意味がある。天命を待ちて悠々たれば吉なるの意味がある。

六一。晉如。愁如。貞吉。受茲介福于其王母。

〔讀方〕 六二は晉如。愁如。貞にして吉なり。茲の介福を其の王母に受く。

〔大意〕 此爻は陰で陰の位に居る。柔中のもの。上六五は聰明の天子であるから柔中の六二を用ゐることがある。故に茲の介福を其の王母に受くといふ。其の始めは用ひられない。中間に九四といふものがあるからである。故に晉如愁如といふたのである。王母といふのは六五のことである。

〔占考〕 直ちに意の如くならざるの意味がある。然れども遂に其の目的を達するの意味がある。人に用ひられるの意味がある。



六三。衆允。悔亡。

〔讀方〕 六三は衆允とす。悔い亡ぶ。

〔大意〕 此の爻は陰で陽の位に居るから極めて危険なものである。けれども晋の卦は進むを主とするの卦である。六五に向つて進むの卦である。今六三は下卦坤の最上に居る。下の二陰を率ゐる意味がある。共に六五に行かんとする。故に衆が之を信するのである。悔い亡ぶる所以である。

〔占考〕 大に人に壓せられる意味がある。けれども下のものには却て喜ばるゝ意味がある。下のものと共に進むの意味がある。衆望を負ふの意味がある。

九四。晋如。鼫鼠貞厲。

〔讀方〕 九四は晋如す。鼫鼠貞なれども厲し。

〔大意〕 此の爻は陽で陰の位に居るから其の所を得ないものである。男子らしからざる所がある。下の三陰が進まんとするに當りて陰險なる妨害をなさんとするの意味がある。其の位に居るべきものでない。故に鼫鼠貞なれども厲しといふ。鼠の如き小人であるといふ意味である。晋の時勢に當つて居るから晋如といふ。各爻晋如といふは晋の時勢萬事進まんとすることをいふたのである。

〔占考〕 位當らざるの意がある。人を阻害するの意味がある。轉覆せらるゝ意味がある。

六五。悔亡。失得勿恤。往吉。无不利。

〔讀方〕 六五は悔い亡ぶ。失得恤ふること勿れ。往いて吉なり。利からざるなし。

〔大意〕 此爻は陰で陽の位に居り萬民の中心たらしとするものである。殊に九四が己れに接近して居るから頗る氣遣はしい。けれども明體離を火となすの中央に居るから其の志は柔にして智は明かである。故に悔い亡びて能く萬民の宗となすことが出来る。故に曰く。失得恤ふると勿れと。其の儘にして往



いて吉である。決して心配してあつた斯うだと考へ直すに及ばないから往いて吉利からざるなしといふたのである。

〔占考〕人より氣遣はるゝの意がある。成功の意がある。己れに接近するものにして己れを害せんとするものあるの意がある。けれども遂に之を免るゝの意がある。

上九。晉其角。維用伐邑。厲吉无咎。貞吝。

〔讀方〕上九は其の角を晋む。維れ用て邑を伐つ。厲ければ吉にして咎なし。貞なれば吝なり。

〔大意〕此爻は陽で陰の位に居り且つ晋の卦の極に居る。此れ進むの極である。更に何れに進まんとするか。尙進まんとするから亂暴のものである。故に其の角を晋むといふ。若し其の勢力を利用して國內不逞の徒を伐ち其の剛に過るの厲きを知つて勉強すれば吉にして咎なきことが出来る。若し剛のまゝにして居れば其の結果は宜しくないといふ處から維れ用て邑を伐つ。厲ければ

吉にして咎なし。貞なれば吝といふ。邑を伐つは國內不逞の徒を伐つといふ。〔占考〕内事を修むるに可なるの意味がある。萬事進まざるを可とするの意がある。剛に過ぎて人が接近せざるの意がある。大に吉ならざるも注意すれば咎なきを得るの意がある。



明夷。利艱貞。

〔讀方〕明夷は艱貞に利し。

〔大意〕此卦は上に坤あり。下に離あり。日地中に入るの象。故に明夷と名く。明夷るの意でたる。賢人隠るゝ時。世界暗黒の時である。此の時に處するに其の艱なることを知つて貞しくするより外ない。故に艱貞に利しといふ。〔占考〕暗き意。欺く意。賢人隠るゝ意。萬事塞がるの意。自ら晦まして時を待つべきの意。外見を飾らざる意あり。内は聰明なれども一見して知らざる意あり。



初九。明夷于飛。垂其翼。君子于行。三日不食。有攸往。主人有言。

〔讀方〕 初九は明夷于に飛び。其の翼を垂る。君子于に行く。三日食はず。往く攸あれば主人言あり。

〔大意〕 此爻は明夷の時に當り。陰で陽の位に居る。動かんとする意あるもの。然れども明離の卦の始めに居るが故に暴動することがない。顯はれずに勉めて忍むで居る。鳥が其の翼を垂れて飛ばず。食はずに我慢して居る様なものである。故に曰く。明夷于に飛び其の翼を垂る。君子于に行く。三日食はずと。若し動くが如きことあつては宜くないといふ處から往く攸あれば主人言ありといふ。主人は初九をいふのである。言とは争ひひつかゝりをいふ。

〔占考〕 時を待つべきの意がある。動いても効なきの意がある。却て害あるの意がある。

六一。明夷于左股。用拯馬壯。吉。

〔讀方〕 六二は明夷于に般る。用て拯ふ。馬壯なり。吉なり。

〔大意〕 此爻は陰を以て陰に居る。柔順中正。且つ明の中央にある。天下は之れに由つて明かにならんとするもの。然れども時や明夷。如何んともする事が出来ない。之を拯ふものは唯九三剛徳ある者の助けを得るにある。僅かに其の功を全うすることが出来る。故に曰く。明夷左に般る。用て拯ふ。馬壯んなり。吉なりと。左に般るは進む能はざると。

〔占考〕 進む能はざるの意味がある。明徳あるの賢人に随ひ其の助けを得て吉なるの意味がある。

九三。明夷于南狩。得其大首。不可疾貞。

〔讀方〕 九三は明夷于に南狩し其の大首を得。疾く貞にす可らず。

〔大意〕 此爻は明夷の時に當り陽で陰の位に居る。過剛不中であるけれども又明體の上に居る。故に事功に於ては成ることあるべし。故に曰く。明夷于に南狩し。其の大首を得ると。南狩は南方に狩りすること。何か大業をなさん



とする。大首は大なる首。即ち獲物のと。但だ剛の一方に任かせて居る時は終に禍を蒙むることがある。故に疾く貞にす可らずと戒めたのである。  
〔占考〕 進むことは出来ない意味がある。上の人に従ふて吉なる意味がある。人を率ゐて且つ成效するの意がある。

六四。入于左腹。獲明夷之心。于出門庭。

〔讀方〕 六四は左腹に入る。明夷の心を獲たり。手に門庭を出づ。

〔大意〕 此爻明夷の時に當り、四に居る。柔順なるもの。其の地中にある（即ち上最下の）が故に時勢如何んともす可からざるものである。故に左腹に入るといふ。左は陰のこと。腹は坤の卦のこと。而も柔順にして靜かにして居るから能く明夷の明夷たる所以を見る。之を明夷の心を獲るといふ。而して其の如何ともす可らざるを知りて其の境遇を脱出せんとす。故に曰く。手に門庭を出づと。  
〔占考〕 其の處る所の暗愚なる意がある。之を知つて機を見て逃れ去るの意味がある。

六五。箕子之明夷。利貞。

〔讀方〕 六五は箕子の明夷る。貞に利し。

〔大意〕 此爻は陰で坤の中に在る。これは柔順にして志は高きものだ。恰も昔し殷の箕子が紂の時勢に生きて居つた様のものである。如何ともすることは出来ない。故に貞に利しといふ。

〔占考〕 禍を蒙るの意味がある。但だ柔中にして居るべきの意味がある。

上六。不明晦。初登于天。後入于地。

〔讀方〕 上六は明かならずして晦し。初めは天に登り。後は地に入る。

〔大意〕 此爻明夷の時に當り柔を以て坤の極に居る。坤は火を蔽ふもの。晦しとなす。何に曰く。明かならずして暗しと。此の如き人は初めは天に在りど雖も後は地に入るを免れず。



〔占考〕 位高きが如くなれども忽ち之を失ふの意がある。他人の妨害になるの意がある。



離下 巽上

家人。利女貞。

〔讀方〕 家人は女の貞に利し。

〔大意〕 此卦は上に巽の長女あり。下に離の中女あり。巽の主爻は四に居り。離の主爻は二に居る。共に其の位を得。即ち婦人が其の位を正うして居るものである。故に家人と名け。又女の貞に利しといふ。婦人の道である。婦人の貞なるが如くせよといふのである。

〔占考〕 此卦は風に火であるから、皆形のないものである。一見すれば甚だ大なるが如きも其の實は空虚なるの意がある。けれども一時は其の勢ひ極めて盛んなるの意がある。上に風があるのだから己れを誘ふものに從へば吉なるの意がある。他に移轉するの意がある。又火が新たに木に移らんとするの意がある。從て火難を戒むべきの意がある。風と火と和合するから結婚に吉なるの意がある。離火なる故に消耗の意がある。熱が腰に在るの意がある。

初九。閑有家。悔亡。

〔讀方〕 初九は家あるを閑ぐ。悔い亡ぶ。

〔大意〕 此爻は陽で陰に居る。其の正しい處に居るものである。家を保つるの道に於ては此くの如くあるべきである。故に家を保つるの初めに於て能く其の道を守るものといふべきである。故に悔いあるべき處も亡くなるから家あるを閑ぐ。悔い亡ぶといふ。

〔占考〕 萬事之を初めに慎むで吉なるの意がある。

六二。无攸遂。在中饋。貞吉。

〔讀方〕 六二は遂ぐる攸なし。中饋に在り。貞にして吉なり。

〔大意〕 此爻は陰で陰の位に居り且つ離の卦の中央に居る。智明かにして且つ



柔順なるものといふべきである。上九五と應じて居る。九五の夫に仕へて能く食物を用ひ萬事敢て自ら専らにせざるが如くである。故に曰く。遂ぐる攸なし。中饋にあり。貞にして吉なりと。遂ぐるなしとは自分勝手の振る舞ひをしないことである。

〔占考〕人を助けて吉なるの意がある。己れは柔順にすべきの意がある。己れ専らにする時は功なきの意がある。

九三。家人嗃々。悔。厲吉。婦子嘻嘻。終吝。

〔讀方〕九三は家人嗃々。悔あり。厲ければ吉なり。婦子嘻嘻たれば終に吝なり。

〔大意〕此爻は陽で陽の位に居るから強過ぎる者。一家を修むれば家人は嗃々として熱きに苦む様なものである。悔いがあるけれども其の餘り嚴になると厲いと思ふて戒むれば吉なることが出来る。故に家人嗃々。悔あり。厲ければ吉なりと。若し寛に過ぎて徒らに嘻嘻として居らしむる様では終に吝なるを免れない。故に曰く。婦子嘻嘻たれば終に吝なりと。

〔占考〕嚴にするに宜しく寛にするに宜しからざるの意がある。轉せんとするの意がある。中庸を得るに勉むべきの意がある。

六四。富家大吉。

〔讀方〕六四は家を富ましむ。大に吉なり。

〔大意〕此爻は陰で陰の位に居る。婦人の正しき道である。家を保つに於て之れに越したる道はない。故に曰く。家を富ましむ。大吉と。

〔占考〕家道をして興らしむるの意がある。けれども大に爲すあるには足らない。人の妻として臣としての活動に於て可なるの意がある。

九五。王假有家。勿恤吉。

〔讀方〕九五は王家あるに假る。恤ふること勿れ。吉なり。

〔大意〕此爻は陽で陽の位に居る。剛中の徳あるものといふべきである。之を



以て家を保てば家は大に興る。之を以て國を保てば國も亦大に興る。けれども此卦は固家人であるから家を保つことに付いていふて居る。殊に六二の應爻がある。故に曰く。王家を有つに假る。恤ふること勿れ。吉なりと。

〔占考〕 家道大に興るの意がある。一人にて事業を興して可なるの意がある。下の助けを得るの意がある。

上九有孚威如終吉。

〔讀方〕 上九は孚有りて威如す。終に吉なり。

〔大意〕 此爻は陽で上に居る。巽の卦の極だから巽順にして孚あるものとする。且つ陽であるから威がある。家を治むるに於て吉なることが出来る。故に曰く。孚あつて威如す。終に吉なりと。

〔占考〕 隱居にして威あるものゝ意がある。事業に關係せずして尊信せらるゝの意がある。



睽。小事吉。

〔讀方〕 睽は小事に吉なり。

〔大意〕 此卦は萬事相ひ背くの卦である。此の如き場合には大事をなすに宜しからず。小事に吉なるのみである。故に小事に吉なりといふ。睽の音は普通ケイといふがキの方が宜しい。

〔占考〕 此卦上に離があり。下に兌がある。離は炎上せんとし、兌は潤下せんとす。和せざるの意がある。又中女小女相ひ並び中女は六五に居り小女は六三にあるから、少女が躁妄の弊あるを免かれない。中女の下に居りて安んずることが出れない。睽乖するの意味がある。萬事漸を以てし、且つ小を以てするに利しきの意味がある。澤は下らんとし、火は上らんとするから、人に附かんとし、出来ぬ意味がある。口舌を以て人に附和せんとするの意がある。火は燃えるけれども下か澤であるから根柢がない。



初九。悔亡。喪馬。勿逐。自復。見惡人。无咎。

〔讀方〕 初九は悔い亡ぶ。馬を喪ふ。逐ふこと勿れ。自ら復す。惡人を見るも咎なし。

〔大意〕 此爻は陽で陽の位に居り且つ應爻がない。恰も馬を喪ふた様なものだ。けれども本來正しい道を踏んで居るものだから終には己れの處に來るものもある。其の人間(九四を指す)は必ずしも善人といふとはないが之れを容れ用ひても宜いといふ處から悔い亡ぶ。馬を喪ふ。逐ふと勿れ。自ら復す。惡人を見るも咎なしといふた。此卦は全體が相ひ離れるといふ意味だから、此爻に就いても亦離れることをいふた。けれども此爻の如きは正しいものであるから、同じく離れる中に於てもまだく人間を得ることが出來るといふ處から此くはいふたのである。馬も九四、惡人も九四である。

〔占考〕 人を得ない意味がある。けれども多少役に立つ人物を得るの意がある。之を用ひて可なるの意がある。大事をなすに不可なるの意がある。

九二。遇主于巷。无咎。

〔讀方〕 九二は主に巷に遇ふ。咎なし。

〔大意〕 此爻は睽の時に當り六五の應爻がある。此れ偶然にも己れを助くるの人を得たるものである。故に曰く。主に巷に遇ふ。咎なしと。遇ふは偶然のことである。巷で遇ふといふのは正式でないことである。二と五と遇ふのは中端同志の會合の意とすることが多いから此くいふのである。

〔占考〕 偶然己れを助くるものを得るの意がある。意氣投合して共に事をなして可なるの意がある。

六三。見輿曳。其牛掣。其人天且劓。无初有終。

〔讀方〕 六三は輿に曳かる。其の牛掣せらる。其の人天且つ劓せらる。初めなくして終りあり。

〔大意〕 此爻は睽の時に當り上に上九といふ應爻がある。けれども己れは六三



といふ宜しくない性質のものである。口舌を以て上上九を説かんとす。上九は剛明の人であるから、怒つて六三を刑せんとする。けれども上九は剛明の人だから睽の時に當り容易に人物の得られざるを思ふて六三と和せんとするに至る。此を形容して此くはいふたのである。即ち六三が其の初め進む能はず。退く能はざる状態は輿に曳きずられて居る許りでなく車を曳く牛が掣せられて居る様なものである。且つ車上の人即ち六三は天即ち上九のために刑せられんとして居る。(輿は刑の一種)故に初めなしといふ。終り合する所から終りありといふ。且は天にしてと天のためとかいふべきである。

〔占考〕 進退如何んともすること能はざるの意がある。大に壓迫せらるゝの意がある。けれども終には其の人と合するの意がある。

九四。睽孤。遇元夫。交孚。厲无咎。

〔讀方〕 九四は睽孤。元夫に遇ふ。交り孚あれば厲けれども咎なし。  
 〔大意〕 此交は睽の時に當り下に應交がない。故に睽孤といふ。下の初九は應

交ではないけれども睽の時だから同類相ひ求むるの意がある。之れと誠心を以て交れば相ひ拯ふの意がある。故に元夫に遇ふ。交り孚あれば厲けれども咎なしといふ。

〔占考〕 偶然にも期せざる處に應援を得るの意がある。之を失はない様に誠意を以て交れば吉なるの意がある。

六五。悔亡。厥宗噬膚。往何咎。

〔讀方〕 六五は悔い亡ぶ。厥の宗膚を噬む。往くも何の咎あらん。

〔大意〕 此交は睽の時に當り下に九二の應交がある。互ひに交ること最も深い。睽の時だから九二も離れて了ふかと疑はるれども其の様なことはない。六五は柔中の徳があるから能く九二を受け受する。九二は六五の柔中のために深く六五の心に入ると恰も柔かな肉なる膚を噬むの感がある。此儘九二と交るに於ては何の咎もないから往くも何の咎あらんといふ。厥の宗とは九二をいふたのである。



〔占考〕位高けれども當然己れを助くべき人の助けを受くる意味がある。人を  
用ひて可なるの意味がある。

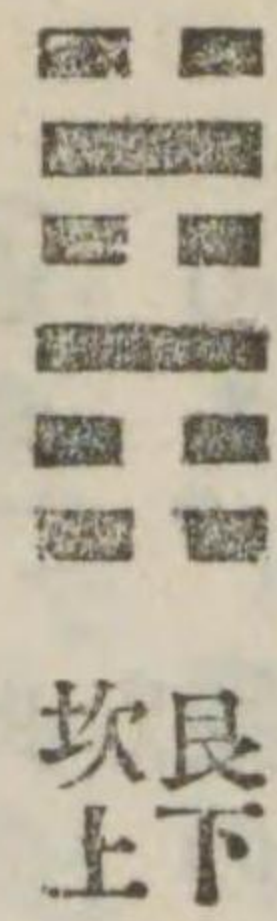
上九。睽孤。見豕負塗。載鬼一車。先張之弧。後說之弧。匪寇婚媾。往遇雨  
則吉。

〔讀方〕上九は睽孤。豕の塗を負ふを見る。鬼を一車に載す。先きには之れが  
弧を張り後には之れが弧を説く。寇するにあらず。婚媾するなり。往いて雨  
に遇へば則ち吉なり。

〔大意〕此爻は睽の時に當り下に六三の應爻がある。けれども六三は陰柔の小  
人で己れと共にすることが出来ない。のみならず九四といふ妨害者がある。  
如何ともすることは出来ない。其の狀態は豕が塗(どろ)を負ふて動くことが出  
來ず。(六三の來られない處)鬼が一車に充ちて怖るべきが如くである。(九四妨  
害の怖るべき處)其處で上九も弓を張りて九四を撃たんとして見るが其れ程の  
こともないとして之を止めて了ふ。元來上九のなす所は六三に婚媾せんとする

のであつて九四に寇せんとするのはでない。今暫く我慢して居るといふと九  
四も自ら退いて了ひ六三と相ひ遇ふことが叶ふ様になる。故に曰く。往いて雨  
に遇へば吉なりと。雨に遇ふは第三第四第五の三爻に☵坎の象がある。其の  
陰陽が和合すると九四が消失して了ふから九四の妨害のなくなるを雨に遇  
ふといふたのである。

〔占考〕己れの遇はんとする人の間を妨害するものあるの意がある。時期を待  
つべきの意味がある。其の間迷ふて居るの意がある。一騒動あつて後に治ま  
るの意がある。



艮下  
坎上

蹇。利西南。不利東北。利見大人。貞吉。

〔讀方〕蹇は西南に利し。東北に利しからず。大人を見るに利し。貞なれば吉  
なり。

〔大意〕此卦は坎難が前に在りて止まり居るから蹇と名づく。困難の時である。



此の如き時は出来る限り自然にして順當なる道を選ばなくてはならぬ。又十分に分設經營せなくてはならぬ。故に西南に利しく。東北に利しからず。大人を見るに利し。貞なれば吉なりといふ。西南は順の地勢、東北は逆の地勢である。大人は九五を指したのである。

〔占考〕 此卦上に坎があり。下に艮がある。卦象を以て之を言へば山上に險がある。蹇の意味がある。阻碍せらるゝの意味がある。然れども險に遇ふて止まり險に陥らざるの意味がある。動いて吉なるの意がある。動く方を慎むべきの意がある。凡て順當の道を選むべきの意がある。水高きより下るの意がある。永續せざるの意がある。主人心を確實にすれば挽回の意がある。險を救ふの人あるの意がある。一たび頽れると容易に挽回せざる意がある。

初六。往蹇來譽。

〔讀方〕 初六。往けば蹇み來れば譽れあり。

〔大意〕 此爻は蹇の時に當り險を以て下に居る。險に遠い。此の儘に止まつて

居れば宜いが進めば險に近くから危險である。故に曰く。往けば蹇み來れば譽れありと。

〔占考〕 險に遠い意味がある。進めば險に近くの意がある。

六二。王臣蹇々。匪躬之故。

〔讀方〕 六二は王臣蹇々。躬の故に匪す。

〔大意〕 此爻蹇の時に當り上九五に應ず。此れ坎中の天子に謁して以て天下を救済せんとするもの。柔中の才を以て天子に仕ふ。己れを忘れて以て公に奉ずるや見るべし。故に曰く。王臣蹇々。躬の故に非すと。蹇々はなやみなやむとである。自己一身のためでない。實に天下のためであるといふのである。〔占考〕 坎難の時に當りて己れを用ふるの人あるの意がある。至誠心を竭くすべきの意がある。成功の意がある。

九三。往蹇來反。



〔讀方〕 九三。往けば蹇み。來れば反る。

〔大意〕 此爻は陽を以て陽の位に居る。過剛不中のもの。進んで險に陥らんとする。けれども艮の主爻であるから止るを知つて居る。故に曰ふ。進めば蹇み。來れば反ると。反るは其の正しき位を得るをいふ。即ち其の處に安んずべきをいふのである。

〔占考〕 動けば不安に陥るの意がある。坎難の時に當り剛に過ぎては不可なるの意がある。控へ目にすべきの意がある。

### 六四。往蹇來連。

〔讀方〕 六四は往けば蹇み。來れば連る。

〔大意〕 此爻陰を以て陰に居る。柔中の性。而も坎の中に陥る。如何ともすることは出來ない。若し動かんとすれば益々坎に入るのみである。寧ろ退いて九三と共にするを可とす。故に曰く。往けば蹇み。來れば連ると。連るは九三と一處になること。即ち九三の進まない様にするをいふのである。九三

は蹇に處するの道に於て宜しきを得て居る。

〔占考〕 如何ともす可らざるの意がある。而も下位のものに従つて進まざるを可とすべきの意がある。難中己れの下なるものと共にするの意がある。

### 九五。大蹇朋來。

〔讀方〕 九五は大に蹇む。朋來る。

〔大意〕 此爻は坎の中爻であるから大に蹇むで居るものといはねばならぬ。けれども下二の賢人があつて來つて之を助けんとする。故に曰く。大に蹇む。朋來ると。

〔占考〕 險難の時己れを助くるの人あるの意がある。力を竭くさば以て積弊を一掃し得るの意がある。己れを虚うして六二の賢人を用ふべきの意がある。此爻が變すれば謙となる。即ち其の意である。

### 上六。往蹇來碩。吉利見大人。



〔讀方〕 上六は往けば蹇み。來れば碩。吉なり。大人を見るに利し。

〔大意〕 此爻蹇の時に當り柔を以て坎の極に居る。此れ時勢を濟ふに足らないものであるが時勢は己に坎難を去らんとして居るものである。宜しく下九三の應爻に従て以て時の至るを待つべきである。然すれば己れも亦大なるものとなるが出来る。故に曰く。往けば蹇み。來れば碩。吉なりと。往けば蹇むは自らなさんとすれば益々困難に陥るをいふのである。而して後九五の天子に逢ふことが出来る。故に曰く。大人を見るに利しと。〔占考〕 何事をもなすことは出来ないが下の賢人に従へば吉なるの意味がある。従つて以て時を待つべきの意がある。而して後天子に會ふことの出来る意がある。



坎下 震上

解。利西南。无攸往。其來復。吉。有攸往。夙吉。

〔讀方〕 解は西南に利し。往く攸なし。其來復す。吉なり。往く攸あるも夙かなれば吉なり。

〔大意〕 雷上に震ひ雨は下に降る。解放の意がある。此卦は上も下も陽氣の卦であるから成るべく陰氣の方に傾く方が宜い。即ち陰陽の調和を得ることに注意すべきであるといふ處から西南に利しといふた。西南は陰の方である。然れども今險難正さに解けたるの時であるから暫く時勢の至るを待たなければならぬ。故に曰く。往く所なければ其來り復す。吉なりと。自然に來り復するをいふ。若し成すべきことあるときは早くするに限る。晚いと如何ともすることはい出来ない。故に曰く。往く攸あるも夙ければ吉なりと。〔占考〕 此卦上に震があり。下に坎がある。卦象を以て之を言へば雷上に震ふて雨下に下る。解の意がある。之を屯に比するに屯は雨が上にあり。雷が下にある。各々其の用を遂ぐる事が出来ない。屯たる所以である。解は屯の雷が動いて上に出で屯の雨が降りて地に入るものである。萬難解くるの意がある。積雲始めて霽れたるの意がある。小事あるの意がある。大事去るの意がある。好運の意がある。氣の長さを要するの意がある。事に由りて夙かに



すべきの意がある。

初六。无咎。

〔讀方〕 初六は咎なし。

〔大意〕 此爻解の時に當り、陰を以て初に居り、上九四に應じて居る。坎の中にあ  
るが、九四に應じて能く之を脱することが出来る。故に咎なしといふ。必ずし  
も吉と言ふ程でない。

〔占考〕 難解けんとするの意がある。人に従て吉なるの意がある。

九二。田獲三狐。得黃矢。貞吉。

〔讀方〕 九二は田して三狐を獲。黃矢を得。貞にして吉なり。

〔大意〕 此爻は解の時に當り、二の位に居る。天下の紛擾方に解けんとして己  
れは獨り才あるもの、而も上六五に應じて居る。即ち天子に用ひられて力を盡  
くすものである。最早亂も略は平らひだ。多少の小人が殘つて居るのみであ

る。故に狐に譬へて、田して三狐を獲るといふた。黃矢は狐を射たもの。狐が  
獲れたから、之を射た矢まで己れに復つて來る。此れは九二の貞にして吉なる  
ためである。

〔占考〕 上の人に信用せらるゝの意がある。効をなすの意がある。己れ獨  
り盛んなるの意がある。好運に向ふの意がある。

六三。負且乘。致寇至。貞吝。

〔讀方〕 六三は負ふて且つ乘る。寇の至るを致す。貞なれば吝なり。

〔大意〕 此爻は解の時に當り、陰で陽の位に居る。亂暴なるものである。世間の  
漸く太平ならんとするときに當り、其の精神が正しくない。恰も物を負ふて居  
る様な小人が君子の乘るべき車に乗つて居る様なものである。必ず寇盜に逢  
ふことを免れない。故に曰く。負ふて且つ乘る。寇の至るを致すと。其の儘  
にして改めざれば悪い。故に貞なれば吝といふ。

〔占考〕 位分に過ぐるの意味がある。ために禍を招くの意がある。一時は幸福



なるが如く見ゆることもある。

九四解而拇。朋至斯孚。

〔讀方〕 九四は而の拇を解け。朋至りて斯れ孚あり。

〔大意〕 此爻解の時に當り、九二と共に事を處するの任に當れるもの。私情に拘泥する様なことがあつてはならぬ。故に而の拇を解けといふ。拇は足の大指で六三をいふたのである。此くして公明正大の態度を取れば九二といふ朋友が来て相互に孚の心を以て感通する。故に曰く。朋至りて斯れ孚ありと。

〔占考〕 同類の應援あるの意味がある。小人を遠くべきの意味がある。天下のこと己れに係るの意味がある。

六五。君子維有解。吉。有孚于小人。

〔讀方〕 君子維れ解くことあり。吉なり。小人に孚あり。

〔大意〕 此爻解の時に當り、柔中の徳を以て下九二の賢人を用ひて居る。一切の難事を解決することか出来、小人も皆來りて服する様になる。故に曰く。君子維れ解くことあり。吉なり。小人に孚ありと。君子は六五をいふたのである。解くことあるは百難を解くのである。

〔占考〕 萬難解決の意がある。人を用ひて吉なるの意がある。餘徳あるの意がある。

上六。公用射隼于高墉之上。獲之。无不利。

〔讀方〕 上六は公用て隼を高墉の上に射る。之を獲て利からざることなし。

〔大意〕 此爻は解の終りに居る。即ち百難の殆んど解けんとする者である。偶ま一二の小人の悪事をなすものあらん。此れ免る可らざる處であるが之を平定して了つて毫頭差支はない。寧ろ夙く退治して了ふべきであるといふ處から隼はやぶさに譬へて公以て隼を高墉の上に射る。之を獲て利からざるなしといふたのである。

〔占考〕 多少の困難あれども平定するの意がある。而して後安全なるの意があ



る。



兌下  
艮上

損。有孚。元吉。无咎。可貞。利有攸往。曷之用。二簋可用亨。

〔讀方〕 損は孚あり。元吉。咎なし。貞にすべし。往く攸あるに利し。曷んぞ之を用ひん。二簋用て享すべし。

〔大意〕 此卦は山の下に澤がある。澤は甚だ低い。己れを損して居るものといふべきである。又上卦の艮は上が陽で大きい。下卦の兌はこれと正反對で上が陰で小さい。下の卦が損して上の卦が益す意味がある。故に卦を名けて損といふ。己れを損するは心に孚があるものでなければ出來ない。故に曰く。孚あり。元吉と。何等の咎のあるべき筈はない。其の儘にして行くべきである。之を以て往けば行はれないといふことはない。此の如きの道は如何に之を用ふべきかといふに質朴を以て人を感動せしむるに在る。恰も二簋粗末の器で以て神を祭るべきが如くである。神すら感動するから人間で感動しないもの

のではない。故に曰く。曷んぞ之を用ひん。二簋用て享すべしと。

〔占考〕 誠心を以てすれば人を感動せしむるの意がある。粗末のものにても大效を奏するの意がある。始めは不利の如くなるの意がある。澤は上に向て開いて居る。山は下に向つて覆ふて居る。物に益をするの意がある。けれども中虚しきの意がある。去れど一面喜びあるの意がある。

初九。己事遄往。无咎。酌損之。

〔讀方〕 初九は事を己めて遄かに往く。咎なし。酌んで之を損す。

〔大意〕 此爻損の時に當り陽を以て六四に應じて居る。己れを損して以て六四に使ふるもの。己れの私事を己めて遄かに六四の處に往かんとするものであるから、咎なしといふべきである。但だ己れを損するに就いては多少考へて見なくてはならぬ。六四は善人とは言ひながら又參酌する所がなくてはならぬ。故に曰く。事を己めて遄かに往く。咎なし。酌んで之を損すと。

〔占考〕 人の急に走るの意味がある。然れども其の間思量を要するの意味があ

山損



る。人に用ひられて力を盡くすの意味がある。

九二。利貞。征凶。弗損益之。

〔讀方〕 九二は貞に利し。往けば凶。損せずして之を益す。

〔大意〕 此爻は剛中の徳があつて六五の天子に應じて居る。其の所に安んじて居つて以て天子のためになる。故に進んで行かすとも宜い。故に曰く。貞に利し。往けば凶と。損の時であるから特に已れを損することなくして能く六五を益することが出来る。故に曰く。損せずして之を益すと。

〔占考〕 剛中の徳を以て自ら上を益するの意味がある。進むに利からざるの意味がある。

六三。三人行則損一人。一人行則得其友。

〔讀方〕 六三は三人行けば則ち一人を損し。一人行けば則ち其の友を得。

〔大意〕 損の卦は下(下)卦即ち死の卦と損して上を益すの意である。今下の卦は三の中の上の一本が陰となつたので三人行つて一人を損したのである。けれども其の一人は上九といふ應爻があるから其の朋を得ることが出来るのである。故に此くいふのである。

〔占考〕 己れと同類より離れる意味がある。離れても却つて人の助けを得るの意味がある。

六四。損其疾。使遄有喜。无咎。

〔讀方〕 六四は其の疾を損す。遄かならしむれば喜あり。咎なし。

〔大意〕 此爻は損の時に當り陰で陰の位に居る。餘り柔に過ぎるものである。けれども上卦に屬して居るから下のものゝために益を受くべきである。故に曰く。其の疾を損すと。即ち初九のために救はれて其の無能を助くる意味である。自分自身は無能であるから早く初九に頼むが宜い。故に曰く。遄かならしむれば喜あり。咎なしと。

〔占考〕 下のために助けられて幸を得る意味がある。速かなるを可とするの意



味がある。進むでなす可からず。守成に止まるべきの意味がある。

六五。或益之。十朋之龜。弗克違。元吉。

〔讀方〕 六五は或は之を益す。十朋の龜も違ふこと能はず。元吉なり。

〔大意〕 十朋の龜といふは貴い龜といふことで鬼神といふが如くである。此爻は天子で臣下のものゝために大に益を受くる者である。鬼神すら感じ至る。違ふ能はずとは必ず來ることである。一切臣民の來るは知れたことである。元吉なる所以。

〔占考〕 大に下の者に助けらるゝ意味がある。

上九。弗損益之。无咎。貞吉。利有攸往。得臣无家。

〔讀方〕 上九は損せずして之を益す。咎なし。貞なれば吉なり。往く攸あるに利し。臣を得て家なし。

〔大意〕 此爻は損の時に當り、超然として上に居る。下より益を受くる者。其の大なるや知るべきである。故に曰く。損せずして之を益す。咎なし。貞吉と。之を以て進めば益々大なることが出来る。故に曰く。往く攸あるに利し。臣を得て家なしと。家なしとは家の如き小なる所に拘泥せざることをいふ。即ち大なるの意である。

〔占考〕 人を得ること多き意がある。



震下 巽上

風雷益

益。利有攸往。利涉大川。

〔讀方〕 益は往く攸あるに利し。大川を渉るに利し。

〔大意〕 此卦は損の反體である。上は三の一陽が損して陰となり下は二の二陰が益して陽となつた。故に名けて益といふ。上を損して下を益す。デモクラシーの意味である。此の心を以て行けば國家として大事業をなすことが出来る。故に曰く。往く攸あるに利し。大川を渉るに利しと。

〔占考〕 此卦は風に雷であるから皆形なきものである。従て一時は盛んでも空



虚の意がある。動いて従順であるから大に仕事をなすことが出来る意味がある。兎に角民衆を得るの意がある。巽を股となし震を足となす。病ひは此邊にある意味がある。巽震共に木であるから草木成長の意味がある。我動いて彼れ従ふから凡て調和するの意がある。凡て不安の意がある。人を命令するの意がある。

初九。利用爲大作。元吉。无咎。

〔讀方〕 初九は大作を爲すに用ふるに利し。元吉。答なし。

〔天意〕 此爻は陽で益の下に居る。大に益を蒙るものである。大に活動して以て報效の孚を盡くすべきである。故に曰く。大作をなすに用ふるに利し。元吉。答なしと。

〔占考〕 大に寵用せらるゝ意味がある。大に活動して報公すべき意味がある。又出来る意味がある。

六二。或益之。十朋之龜弗克違。永貞吉。王用享于帝。吉。

〔讀方〕 六二は或ひは益を益す。十朋の龜も違ふこと難はず。永貞なれば吉なり。王用て帝に享せらる。吉なり。

〔天意〕 此爻は柔中の徳ありて上九五の天子に應ず。大に寵用せらる。鬼神皆來り感ず。永貞ならんことを要す。九五の君は六二の臣を用ひて以て神を祭る。(帝は天帝の神も亦之を享ける。王が神に享けらるれば則ち六二の徳の神に達するは知るべきである。

〔占考〕 大に恩寵を蒙るの意味がある。人皆集まるの意味がある。上の人も己れに由りて信用を得る。

六三。益之用凶事。无咎。有孚中行。告公用圭。

〔讀方〕 六三は之を益すに凶事を用てす。答なし。孚ありて中行す。公に告げて圭を用ふ。

〔天意〕 此爻益の時に當り不中不正。益を受けても初九六二の如くではない。益を受くるには違ひないが凶事に於て之を受くるのみである。故に答なきこ



とが出来来る。けれども此の如き場合は孚の心あつて中行に合すべきである。然るときは九五の天子(公といふ)に告げて圭を用ひ以て神を祭り神も亦感格する。故に此くいふたのである。

〔占考〕 僅かに不幸を免るゝの意味がある。孚を以てすれば難事を成し遂ぐるの意味がある。

六四。中行。告公從。利用爲依遷國。

〔讀方〕 六四は中行。公に告げて從はる。依ることをなし國を遷すに用ふるに利し。

〔大意〕 此爻は陰で陰の位に居る。柔に過ぎて何事も出来ないものであるが九五に従順であるから九五も亦之を信用して居る。故に中行公に告げて從はるといふ。人民が之れに依り(依頼)來るから其れに應じてやり(依る)ことをなす且つ人民のために國を遷すことをしても宜いといふのである。

〔占考〕 中行をなせば天子に用ひらるゝ意がある。人民の爲めを計りために國を遷すの意味がある。人民の依る所となるの意味がある。

九五。有孚惠心。勿問。元吉。有孚惠我德。

〔讀方〕 九五は孚ありて惠心なり。問ふこと勿れ。元吉なり。孚ありて我が徳を惠とす。

〔大意〕 此爻は天子として人民を惠むものである。人民も亦九五の徳を恩恵と心得て居る。故に曰く。孚ありて惠心なり。問ふことなかれ。元吉。孚ありて我が徳を惠とす。

〔占考〕 大に人に施す意味がある。人吾れを徳とするの意がある。

上九。莫益之。或擊之。立心勿恒。凶。

〔讀方〕 上九は之を益することなし。或ひは之を撃つ。心を立つること恒なし。凶なり。

〔大意〕 此爻益の時に當り剛を以て巽の極に居る。己れの利を計るに熱心なる



もので人のためを謀らない。(巽は利益の卦である)故に人惡むで之を擊つことがある。其の然る所以は心に恒がないからである。(巽は躁がしい卦である)凶なる所以である。

〔占考〕厚く自ら封殖するの意味がある。人に惡まるゝの意味がある。



乾下 兌上

夬。揚于王庭。孚號有厲。告自邑。不利即戎。利有攸往。

〔讀方〕夬は王庭に揚ぐ。孚ありて號せば厲きことあり。告ぐること邑よりす。戎に即くに利しからず。往く攸あるに利し。

〔大意〕此卦五剛を以て一陰を決せんとす。故に夬と名づく。其の勢ひ最も熾なり。天子の庭に迄到達する様であるから、王庭に揚ぐといふ。孚の心がある。之を以て號令すれば随分厲いことはあるが兎に角下の方のものが段々ど勢力を得るのであるから恰も昔し天子の徳が衰へたときは禮樂刑政諸侯より出づといふたと同じことである。故く曰く。告ぐること邑よりすと。此の如

きの時は戦争をすることなけれ。けれどもなすべきこと夬はせなければならぬといふのである。

〔占考〕此卦上に兌がある。下に乾がある。卦體を以て之を言へば五陽一陰を決せんとす。大勢既に定まるの意味がある。卦徳を以て之を言へば内剛に外説ぶ。喜び至るの意味がある。暴に失すべからざる意がある。小人運命迫るの意がある。小人にして榮華を極めしもの遂に亡ぶるの意がある。病は下より膨脹し昂進の意がある。

初九。壯于前趾。往不勝。爲咎。

〔讀方〕初九は前趾に壯なり。往くも勝たず。咎となす。

〔大意〕此爻夬の時に當り陽で陽の位に居る。強いものであるから進まんとして己めない。故に前趾に壯なりといふ。けれども初九の位は微であるから到底上六を決することは出来ない。故に往くも勝たずといふ。咎たる所以である。



〔占考〕 進むときは不可なるの意がある。手に合はない意がある。

九二。惕號。莫夜有戎。勿恤。

〔讀方〕 九二は惕れ號ぶ。莫夜戎あり。恤ふることなかれ。

〔大意〕 此爻は夬の時に當り陽で陰の位に居る。善い人である。故に何か事をするにも切りに惕れて注意する。其の聲外に見はるゝ様だ。故に曰く。惕れ號ぶと。此の如きの時は不測の變事がある。恰も暗夜(莫夜)に兵甲の音がする様なものだが心配には及ばない。必ず成功する。

〔占考〕 不測の禍に逢ふの意味がある。安んじて以て免るゝの意味がある。

九三。壯于頄。有凶。君子夬々。獨行遇雨。若濡有愠。无咎。

〔讀方〕 九三は頄に壯なり。凶あり。君子夬を夬す。獨行して雨に遇ふ。若し濡るゝも愠ることあれば咎なし。

〔大意〕 此爻は過剛であつて剛り上の上六に應じて居る。其の上六を夬せんとするの志は甚だ強い。顔(頄)は顔骨で顔のことに見はれる。餘り烈しいから必ず凶がある。けれども其の夬する志は君子の志といはねばならぬ。故に君子夬を夬すといふ。只上六に籠絡せらるゝことは獨り行いて雨に遇ひ濡るゝが如くである。若し心に愠る所ありて此様ではならんといふ様にすれば咎はない。故に愠ることあれば咎なしといふ。

〔占考〕 剛に過ぎて禍を蒙むるの意味がある。人に籠絡せらるゝの意味がある。中心愠ることありて以て免るゝの意味がある。

九四。臀无膚。其行次且。牽羊悔亡。聞言不信。

〔讀方〕 九四は臀に膚なし。其の行くこと次且。羊を牽けば悔い亡ぶ。言を聞くも信せず。

〔大意〕 此爻夬の時に當り陽で陰の位に居る。上六を夬する丈の氣力がない。故に曰く。臀に膚なし其の行くこと次且と。若し九五と共に働けば宜い。九四九五上六は兌の卦で羊である。羊を牽くは九五と一所になることである。



故に曰く。羊を牽けば悔い亡ぶと。九四の缺點は人の言を聞いても信ぜざるに在る。

〔占考〕志弱くして上の人と共なる能はざるの意がある。勉めて上の人と共なるべきの意がある。陰を御するの道に於て失ふことなきを要するの意がある。

九五。竟陸夬々。中行无咎。

〔讀方〕九五は竟陸夬を夬す。中行なれば咎なし。

〔大意〕此爻剛中の徳を以て六五を夬せんとす。只之れと接近して居るから籠絡せらるゝ疑ひがある。要するに中行なれば宜いのである。竟陸とは雜草の名で上六に譬へたものである。夬を夬すは夬すべき竟陸を夬するといふのである。

〔占考〕小人と比周するの疑ひある意味がある。然れども其の志を實行して疑ひを避くるを得るの意味がある。萬難霽るゝ意がある。

上六。无號終有凶。

〔讀方〕上六は號ふことなし。終に凶あり。

〔大意〕此爻は陰で陰の位に居り且つ高い。下より五陽の逼り來るあり。自ら省みること知らない。故に曰く。號ふことなしと。終に凶ある所以である。

〔占考〕九三なる應爻あれども時非にして來らざる意がある。下より多數壓迫し來るの意がある。



姤。女壯。勿用取女。

〔讀方〕姤は女壯なり。女を取るに用ふる勿れ。

〔大意〕此卦は一陰が下から生ずるのであるから悪い意味である。姤は遇なりといふて一陰を以て五陽に遇ふたのだといふのだが兎に角善くない意味である。此卦は陰が下から長せんとするものである。女の氣の壯なるものである。故に此の如きの女を取つてはならぬといふのである。

〔占考〕此卦は小人増長の意がある。悪人漸盛の兆がある。君子退くの意があ



る。外面強く内面柔なる意がある。巽を利益となす。巽が新たに生じたのであるから大に利益あるの意がある。凡て偶然なるの意がある。内に迷ふの意がある。風の中に入るの意がある。

初六。繫于金柅。貞吉。有攸往。見凶。羸豕孚。蹢躅。

〔讀方〕 初六は金柅に撃がる。貞なれば吉なり。往く攸あれば凶を見る。羸豕の孚。蹢躅たり。

〔大意〕 柅は物を止むる木。金は之れに附ける金。初六は一陰で五陽に會せんとするものであるが到底敵はない。故に金柅に撃がるといふ。此の如きの時貞にすれば宜い。若し進んで事をなさんとすれば宜くない。故に曰く。往く攸あれば凶を見る。初六は例へば羸豕(やせたる豕)の如きものである。何も出來ないが一心不亂になると多少仕出かすことが出来る。故に蹢躅たりといふ。〔占考〕 進むに利からざるの意がある。一心になれば終に大に延るの意がある。九二。包有魚。无咎。不利賓。

〔讀方〕 九二は包に魚あり。咎なし。賓に利しからず。

〔大意〕 此爻剛中の徳を以て初六を制す。初六は其のために籠絡せらるゝ故に包に魚あり。咎なしといふ。初六は九四の應爻である。九二は初六を制御し九四に接近せざらしむ。故に曰く。賓に利しからず。賓に見せしむるに宜からざるをいふなり。

〔占考〕 人を籠絡するの意味がある。人のために計るの意味がある。己れ獨り得るの意がある。

九三。臀无膚。其行次且。厲无大咎。

〔讀方〕 九三は臀に膚なし。其の行くこと次且す。厲ふけれど大咎なし。

〔大意〕 此爻は過剛不中で初六を籠絡せんとするけれども二が既に之を得て居るから己れは安んぜない。故に其の處を形容して臀に膚なし。其の行くこと次且すと。過剛不中の爻であるから中々暴れるから厲い。けれども大なる咎はない。



〔占考〕 進退定まらざるの意がある。望むでも得られざるの意味がある。

九四。包无魚起凶。

〔讀方〕 九四は包に魚なし。凶を起す。

〔大意〕 此爻は初六と應じて居るけれども初六は己に九二のために得られて居る。九四怒りて九二と争はんとす。故に凶を起すといふ。然れども初六は宜きものでない。構はない方が宜いのである。

〔占考〕 己れの得べきもの得られざるの意がある。然れども此は得ても必ずしも宜からざるものなるの意がある。争ひを起すの意がある。

九五。以杞包瓜。含章。有隕自天。

〔讀方〕 九五は杞を以て瓜を包む。章を含む。隕つることあり天よりす。

〔大意〕 此爻剛中の徳あつて能く九二を用ふ。九二は即ち初六を籠絡して居る。であるから恰も天から隕ちたる如く實に立派なるものである。杞は九二に譬へた。

〔占考〕 己れ自ら手を下さずして片付く意がある。幸運の意がある。内に幸あるのがある。

上九。姤其角。吝无咎。

〔讀方〕 姤其れ角たり。吝なれども咎なし。

〔大意〕 此爻は剛を以て遠く初六に離れて居る。心の清い氣の狭い人である。其の處を形容して其れ角たりといふ。角の様だといふのである。姤とは姤の時に當つてといふことである。此の如きは吝の道である。人は世間と交際せなければならぬものである。けれども咎のないは明かである。

〔占考〕 狷介にして人と交らざる意がある。大なる幸はない。けれども必ずしも不幸もない意味がある。



坤下  
艮上



萃。亨。王假有廟。利見大人。亨。利貞。用大牲吉。利有攸往。

〔讀方〕 萃亨る。王有廟に假る。大人を見るに利し。亨る。貞に利し。大牲を用ひて吉なり。往く攸あるに利し。

〔大意〕 此卦は地上に澤がある。水萃まるの意がある。又坤を衆となす。兌を説ぶとなす。衆が説ぶ意がある。故に卦を名けて萃と曰ふ。物集まるの卦盛大の卦である。故に天子が廟に至り百官之れに従ふの象を取りて之を形容して居る。此の様の時勢であるから何事をしても宜いといふのである。有廟に假るは人を感じしめ人を集めるをいふのである。大牲を用ふは大なる犠牲を用ふることで大なる祭りのことである。此卦は九四九五の二陽が中心で其れに上下四陰が萃まるのである。

〔占考〕 物聚まる意がある。盛大の意がある。大に人を會するの意味がある。外説ばしきが如き内虚しきの意がある。病は口より腹に入るに基く意味がある。忽ち盡きる意味がある。二人の長者ある意味がある。

初六。有孚不終。乃亂乃萃。若號。一握爲笑。勿恤。往无咎。

〔讀方〕 初六は孚ありて終らず。乃ち亂れ乃ち萃る。若し號けば一握笑をなす。恤ふること勿れ。往いて咎なし。

〔大意〕 此爻は陰を以て九四に應じて居る。けれども九五にも應せんとして迷ふて居る。故に曰く。孚あつて終らず。乃ち亂れ乃ち萃る。若し斷然九五に萃まることに決定すれば則ち遂に吉あり。故に曰く。若し號けば斷然決する意一握笑をなす。恤ふること勿れ。往いて咎なしと。

〔占考〕 進退決する能はざるの意味がある。斷じて正理に附くべき意味がある。己れの附くべき人が二人ある意がある。其の撰擇に由りて運命は決せらるゝ意味がある。

六一。引吉。无咎。孚。乃利用禴。

〔讀方〕 六二は引けば吉なり。孚あり。乃ち禴を用ふるに利し。



〔大意〕 此爻は柔中の徳あつて上下二陰を率ゐて九五に應せんとする。故に曰く。引けば吉なり。咎なしと。又孚の心あるものだから如何に外見は粗末でも精神を以て神を感動し、人を感動することが出来る。禴といふのは夏の祭りで極めて質素のものである。六二の功德の大なるをいふたのである。

〔占考〕 己れ獨り進まず上下の人を連れて往く意味がある。人を感動せしむる意味がある。

六三。萃如嗟如。无攸利。往无咎。小吝。

〔讀方〕 六三は萃如し嗟如す。利する攸なし。往いて咎なし。小く吝なり。

〔大意〕 此爻は萃の時に當り上に應爻がない。九五に會せんとしても九四に阻

まる。けれども斷じて九五に歸らなければならぬ。歸れば則ち差支はない。唯固より小吝あるは免れない。嗟如とは九五に會することの出来ないをいふ。

〔占考〕 己れの行かんとするを阻すものあるの意がある。けれども斷じて行くの意がある。

九四。大吉。无咎。

〔讀方〕 九四は大吉にして咎なし。

〔大意〕 此爻萃の時に當り下三陰の萃らんとする所となる。而も陽を以て陰位

に居る。柔の性あり。敢て専らにせず。必ず天子に歸往す。故に曰く。大吉

にして咎なしと。

〔占考〕 人の信賴を得るの意味がある。大に吉なるを得るの意味がある。己れの

從ふべき人に從ふべきの意がある。

九五。萃有位。无咎。匪孚。元永貞。悔亡。

〔讀方〕 九五は萃に位あり。咎なし。孚とするにあらず。元永貞なれば悔亡

ぶ。

〔大意〕 此爻は天子の位であつて一切臣民の集まる中心であるから少しも悪い

ことはない。當然此くあるべき位である。けれども九四といふものがある



ために人民は九四に集まる。己れの處に來ない。(孚とするにあらすとは孚が人民にまで感通しないこと)だが元永貞の徳を守つて居れば遂に人民の心と感通することが出来るのである。

〔占考〕 小逆境のあるの意がある。元永貞の徳を守れば終に感通するの意がある。

上六。齋咨。涕。无咎。

〔讀方〕 上六は齋咨し涕洟す。咎なし。

〔大意〕 此爻は萃の時に當り九五に萃らんとしても萃り得ない。下に應爻がないから分る。故に嘆息齋咨といふして目から涕を出し鼻から洟を出すに至る。けれども遂に萃まることが出来る。時を待つのみであるから咎なしといふ。

〔占考〕 時の至るを待つて始めて萃まることの出来る意がある。處世上道徳上の訓戒としては人間は餘り超然主義であつてはならぬといふことである。

巽上 坤上

升。元亨。用見大人。勿恤。南征。吉。

〔讀方〕 升は元に享る。大人を見るに用ふ。恤ふること勿れ。南征して吉なり。

〔大意〕 此卦上に坤がある。下に巽がある。卦徳を以て之を言へば内巽にして外順大に升るの意味がある。卦象を以て之を言へば木地中に生ず。大に升り出づ。象を以て之を言へば風地中に入り。升らざれば已まざるの意味がある。凡て升るの意味がある。此く凡て升る意味があるから元に享るといふ。又一切のことをしても宜いから大人を見るに用ふといふ。恤ふると勿れ南征して吉とは南方に行いて宜いといふので此卦の象に就いていふたのである。此卦は坤(西南)巽(東南)であるから南方が此卦の性質に合して居るのである。

〔占考〕 新たに勃興の意がある。巽を利となすから増殖の意がある。從順なれば成功するの意がある。南方に吉なるの意がある。病は風が腹中に入るの意がある。脾を害するの意あり。未だ大に發達せず次第に成長するの意がある。



初六。允升。大吉。

〔讀方〕 初六は允に升る。大吉なり。

〔大意〕 此爻升の時に當り下卦巽木の主交たり。木が下より成長し風が下より升るの意を示めすものである。故に允に升る。大吉といふ。

〔占考〕 次第に大に升る意味がある。春の意味がある。

九二。孚。乃利用禴。无咎。

〔讀方〕 九二は孚あり。乃ち禴を用ふるに利し。咎なし。

〔大意〕 此爻は剛中の徳があつて六五に應じて居る。六五の信賴する所となつて居る。大に升ることが出来る。六五は其の孚の心に感動される。故に曰く。孚あり。乃ち禴を用ふるに利し。咎なしと。禴は薄祭である。薄祭でも神を感ずることが出来るのである。

〔占考〕 大に升るの意味がある。誠意人を感ずるの意味がある。

九三。升虚邑。

〔讀方〕 九三は虚邑に升る。

〔大意〕 此爻は過剛であつて上は皆陰許りである。故に已れの升らんとするを害するものはない。無人の地を行くが如くである。故に虚邑に升るといふ。虚邑は坤の象である。

〔占考〕 大に升るの意味がある。阻害物なき意がある。

六四。王用亨于岐山。吉无咎。

〔讀方〕 六四は王用て岐山に亨す。吉にして咎なし。

〔大意〕 此爻升の時に當り陰を以て四に居る。柔順の徳。天下が之れに歸する。而も臣節を守つて分を踰えることをしない。恰も周の文王が岐山にて神を祭りて居つた時の状態である。

〔占考〕 其の分に安んずるの意味がある。大に人望を得るの意がある。將來有